青森県埋蔵文化財調査報告書　第627集

上野平遺跡

－国道338号交通安全対策事業に伴う遺跡発掘調査報告－

２０２２年３月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、令和２年度に国道338号交通安全対策事業予定地内に所在する上野平遺跡の発掘調査を実施しました。

本遺跡は、むつ市川内町の宿野部地区の海に面した段丘上に位置しており、鯛島や大島（夏泊崎）・岩木山を望むことができます。過去の調査で平安時代の製塩に関連すると思われる遺構や中世の人骨等が見つかっていることから、注目されてきた遺跡でもあります。

今回の調査の結果、縄文時代及び平安時代の遺構や遺物を確認しました。特に、下北半島では検出例の少ない平安時代の竪穴建物跡を確認したことは注目されます。

この調査成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきましたむつ市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心より感謝いたします。

令和４年３月

青森県埋蔵文化財調査センター
所　長　葛　西　浩　一

例　言・凡　例

1　本報告書は、青森県県土整備部道路課による国道338号交通安全対策事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和２年度に発掘調査を実施したむつ市上野平遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は、1,500㎡である。

2　上野平遺跡の所在地は青森県むつ市川内町宿野部上野平地内、青森県遺跡番号は208097である。

3　発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。

4　本報告書に関する発掘調査から整理・報告書作成までの間は、以下のとおりである。

　　発掘調査期間　　令和２年５月12日～同年７月17日

　　整理・報告書作成期間　令和３年４月１日～令和４年３月31日

5　本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター平山明寿文化財保護主幹、笹森一朗文化財保護主幹が担当した。依頼原稿及び委託原稿については、文頭に執筆者名あるいは機関を記した。発掘調査成果の一部は、ホームページや発掘調査報告等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書が優先する。

6　発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

　遺跡・遺構の空中写真撮影　　有限会社　無限

　放射性炭素年代測定および

　　炭素・窒素安定同位体比測定分析　　株式会社　パレオ・ラボ

　遺物の写真撮影　　有限会社　無限

　遺物写真切り抜き　　株式会社　知立造園

7　遺跡及び周辺の地形・地質の原稿は根本　直樹氏（国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科）に依頼した。

8　石器の石質鑑定は調査員島口　天氏（青森県立郷土館）に依頼した。

9　火山灰の分析は佐々木実氏（国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科）に依頼した。

10　本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の地図を合成・加工して使用した。

11　測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ｘ系による。挿図中の方位は、すべて座標北を示している。

12　遺構には、その種類を示すアルファベットの略号に検出順位を示す算用数字を組み合わせた略称を遺構ごとに付した。遺構に使用した略号・略称は以下のとおりである。

　　SI：竪穴建物跡　　SK：土坑　　SN：焼土遺構

13　遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号と番号を付した。略号は、以下のとおりである。

　　Ｐ：土器　　Ｓ：石器　　Ｃ：炭化材

14　遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。各土層の色調表記

等には、『新版標準土色帖2006年版』（小山正忠・竹原秀雄）を基に記録した。土層断面図には水準点を基にした海抜標高を付した。

15　各挿図中の遺構実測図の縮尺は、原則として、竪穴建物跡・土坑・焼土遺構は1/60とし、スケールを示した。地形図・調査区域図・遺構配置図等は適宜縮尺を選択し、各挿図にスケールを示した。使用した網掛けは、下記のとおりである。

炭化物範囲　　焼土範囲

16　各遺構の規模に関する計測値は、原則として現存値を記載している。構築時の形状・規模を把握出来ない事例（他遺構・撹乱による破壊、調査区域外への延伸等）については、（　）を付して、現存値を示した。

17　遺物実測図の個別番号は、図版ごとに１から遺物番号を付した。

18　遺物実測図の縮尺は、土器類1/3、剥片石器類1/2、礫石器類1/3、鉄生産関連遺物1/3、銭貨1/1を原則とし、各挿図にスケールを示した。また遺物実測図に使用した網掛けは、下記のとおりである。

炭化物付着範囲（強）
煤付着範囲

炭化物付着範囲
被熱範囲（強）

内黒処理
被熱範囲

磨痕

19　各遺物写真には遺物実測図と共通の図番号を付しており、縮尺は不同である。

20　発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

21　発掘調査及び整理、報告書作成に際して、下記の機関・個人からご協力、ご指導を得た。

川内公民館、宿野部町会、多善寺、東通村教育委員会、むつ市川内庁舎、むつ市教育委員会、むつ市脇野沢庁舎、笹沼正悦、笹原博文

目　次

序
例　言
目　次
挿図目次・写真図版目次・表目次

第１章　調査概要 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の方法 …… 1
第３節　調査及び整理体制 …… 2
第４節　発掘・整理作業経過 …… 3
第２章　遺跡の環境 …… 5
第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 5
第２節　上野平遺跡及び周辺の地形・地質について …… 8
１　上野平遺跡の位置と周辺の地形の概要 …… 8
２　上野平遺跡周辺の地質 …… 9
第３節　上野平遺跡の基本土層 …… 12
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 16
第１節　概要 …… 16
第２節　検出遺構と出土遺物 …… 16
１　竪穴建物跡 …… 16
２　土坑 …… 22
３　焼土遺構 …… 24
第３節　遺構外出土遺物 …… 25
第４章　自然科学分析 …… 32
第１節　上野平遺跡出土の火山灰について …… 32
第２節　放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体比測定 …… 35
第５章　総括 …… 42
第１節　縄文時代の上野平遺跡について …… 42
第２節　平安時代の上野平遺跡について …… 44
１　遺構について …… 44
２　遺物について …… 45
３　平安時代の様相について …… 49
引用参考文献 …… 52
写真図版
報告書抄録

挿図目次

図１　遺跡位置図 …… 7
図２　上野平遺跡周辺の地形分類図 …… 8
図３　上野平遺跡周辺の水系図 …… 9
図４　上野平遺跡周辺の地質図 ……10
図５　基本土層図 ……13
図６　路線図・調査区域図 ……14
図７　遺構配置図 ……15
図８　第１号竪穴建物跡(新)(１) ……18
図９　第１号竪穴建物跡(新)(２) ……19
図10　第１号竪穴建物跡(旧) ……21
図11　土坑・焼土遺構 ……23
図12　遺構外出土遺物(１) ……29
図13　遺構外出土遺物(２) ……30
図14　遺構外出土遺物(３) ……31
図15　上野平遺跡出土遺物集成図(１) ……46
図16　上野平遺跡出土遺物集成図(２) ……47
図17　上野平遺跡の土地利用状況 ……51

写真図版目次

写真１　遺跡近景 ……57
写真２　遺跡遠景・基本土層 ……58
写真３　作業状況 ……59
写真４　第１号竪穴建物跡(新)(１) ……60
写真５　第１号竪穴建物跡(新)(２) ……61
写真６　第１号竪穴建物跡(旧) ……62
写真７　土坑 ……63
写真８　焼土遺構(１) ……64
写真９　焼土遺構(２) ……65
写真10　調査完了状況(１) ……66
写真11　調査完了状況(２) ……67
写真12　遺構内出土遺物 ……68
写真13～14　遺構外出土遺物(１)～(２) ……69

表目次

表１　上野平遺跡と周辺の遺跡一覧 …… 6
表２　石器組成表 ……42
表３　土器観察表 ……54
表４　石器観察表 ……55
表５　土製支脚観察表 ……55
表６　鉄生産関連遺物観察表 ……56
表７　陶磁器観察表 ……56
表８　銭貨観察表 ……56

第１章　調査概要

第１節　調査に至る経緯

国道338号交通安全対策事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、平成29年度から青森県県土整備部道路課及び下北地域県民局地域整備部道路施設・高規格道路建設課（以下「道路施設課」）と青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）が継続的に協議・踏査を重ねてきた。用地買収や立木伐採等上物撤去の進捗状況に合わせて、令和元年８月に文化財保護課が試掘調査を行ったところ、遺構（焼土遺構）や遺物（土師器）が確認されたことから、工事用センター杭No.３～８間について遺跡の範囲変更を行い、工事用センター杭No.４～７間については工事施工前の本発掘調査が必要であるとした（青森県教育委員会2020）。

この結果を受け、再度道路施設課と文化財保護課との間で協議を行ったが遺跡の現状保存が困難であることから、工事優先箇所や他調査事業との調整を経て、令和２年度に上野平遺跡の本発掘調査を実施する計画とし、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当することとなった。

なお、令和２年２月28日付け下県局整備第1286号で下北地域県民局長から文化財保護法第94条第１項の土木工事等のための発掘に関する通知がなされ、青森県教育委員会教育長が令和２年３月６日付け青教文第1411号で工事着手前の本発掘調査（記録保存調査）を指示している。

第２節　調査の方法

１　発掘作業の方法

［測量基準点・水準杭の設置・グリッド設定］調査区設定・遺構測量に用いた基準点は、調査区の内外に打設されていた工事用基準（４級基準点）を利用した。基準点からの測量に支障が生じた場合、調査区内の任意点に座標を移動し使用した。グリッドは世界測地系による国土座標値を基準として４×４ｍに設定した。原点Ａ―１は平面直角座標第Ｘ系のＸ＝130,300、Ｙ＝8,000とした。各グリッドは南から北方向にアルファベットを、西から東方向に算用数字を１から付し、南西隅の組み合わせで呼称した。

［基本土層］基本土層は、試掘調査の結果を踏まえ、調査区の堆積を把握できるように、主に調査区壁面で確認し、上位から層順に第Ⅰ層、第Ⅱ層とローマ数字を付した。基本土層は、土層観察時に色調や混入物により第Ⅴａ・第Ⅴｂ層などと細別した箇所もあるが、遺物取り上げは大別層ごとに行った。

［表土等の調査］試掘調査成果を踏まえ、表土の除去には重機を用いて掘削の省力化を図った。遺構外出土と判断した遺物は、調査グリッドと出土層等を記録し取り上げた。

［遺構の調査］遺構の検出は主に基本土層の第Ⅱ層もしくは第Ⅲ層上面で行った。検出遺構は、原則として確認順に番号を付し、略称との組み合わせで呼称した。堆積土層観察用のセクションベルトは、主に土坑・焼土遺構は２分割、竪穴建物跡は４分割で設定し、調査を行った。遺構内堆積土には、確認面から順に層序番号を算用数字で付し、ローマ数字の基本土層と区別した。遺構内遺物の出土位置の記録は、ソキア製トータルステーションによる測量点を元に、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」によるデジタル測量によった。竪穴建物跡、土坑等の平面図および堆積土の断面図は、グ

リッド杭を用いた簡易遣り方測量または前述のデジタル測量のいずれかによって、原則として縮尺1/20の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、層位ごとに取り上げた。また、出土状況によっては、遺物微細図の作成も行った。

［写真撮影］原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサル、および約1,800万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の検出・精査状況、完掘後の全景等を記録した。

２　整理・報告書作成作業の方法

［図面類の整理］遺構は、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」で作成した平面図・堆積土層断面図または簡易遣り方実測で作成した堆積土層断面図の調整を行った。

［写真類の整理］35mmモノクロームフィルム及び35mmカラーリバーサルフィルムは撮影順にアルバムに整理収納し、デジタルカメラのデータは遺構ごとに整理し、HDDに保存した。

［遺物の洗浄・注記と接合・復元］遺物の注記は、調査年度、遺跡名、遺構名またはグリッド、出土層位、取り上げ番号を略記した。直接注記できないものは、収納した袋に記載した。

［報告書掲載遺物の選別と観察・図化］縄文土器・土師器・須恵器・擦文土器・陶磁器については、時期・型式毎に分類した上で、遺構の構築時期を示す資料、時期・型式の特徴を良く表す復元資料を主として選別した。その他の遺物については、器種毎に分類した上で、遺構に伴って出土した資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料を主として選別した。

一定の形状を復元した資料や遺構の構築時期を示す資料については、原則として実測図を作成して形状・特徴等を記録し、観察表を作成した。

［遺物の写真撮影］有限会社無限に委託して実施した。質感や製作技法等を表現するよう留意して撮影した。

［自然科学分析］石器の石材産地を同定するために石質鑑定を調査員島口　天氏に依頼した。土器付着炭化物の年代や由来を明らかにするため、放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体比測定分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。

［遺物の実測・遺物写真切り抜き］土器・剥片石器・礫石器のトレースは、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」もしくは「遺物実測支援システム」またはアドビ株式会社製Illustratorを用いて行った。遺物写真の切り抜きは、株式会社知立造園に委託した。写真図版はアドビ株式会社製Photoshopで調整した。版下はアドビ株式会社製IndesignおよびIllustratorを用いて行った。

第３節　調査及び整理体制

１　発掘調査体制

発掘調査体制は以下のとおりである。

調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所長	佐藤　禎人（現青森県立図書館長・近代文学館長）
	次長（総務ＧＭ）	川村　和夫（現梵珠少年自然の家所長）
	調査第二ＧＭ	齋藤　岳

文化財保護主幹　　平山　明寿（発掘調査担当者）
文化財保護主幹　　笹森　一朗（発掘調査担当者）
文化財保護主事　　藤田　祐　（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調　査　員	三浦　圭介	青森中央学院大学非常勤講師（考古学）
〃	工藤　竹久	青森県文化財保護審議会委員（考古学）
〃	根本　直樹	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師（地質学）
〃	島口　天	青森県立郷土館　学芸課長（地質学）

２　整理・報告書作成体制

整理主体　　青森県埋蔵文化財調査センター

所長　　葛西　浩一
総務ＧＭ　　油布　恵美
調査第二ＧＭ　　齋藤　岳
文化財保護主幹　　平山　明寿（報告書作成担当者）
文化財保護主幹　　笹森　一朗（報告書作成担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調　査　員　　島口　天　　青森県立郷土館　学芸課長（地質学）

第４節　発掘・整理作業経過

１　発掘作業の経過

上野平遺跡の発掘調査は、令和２年５月12日に開始し、同年７月17日に終了した。発掘作業の経過は以下のとおりである。

５月12日　　発掘調査作業員に作業の説明等や発掘調査器材等の搬入を行い、発掘調査を開始した。

５月中～下旬　新型コロナウイルス感染症防止対策で職員をローテーションしながら発掘作業を行った。過去の調査の痕跡や遺構（土坑・焼土遺構）を検出した。

６月上～中旬　職員３人揃っての調査を開始した。第Ⅱ層の調査を終了し、引き続き第Ⅲ層の調査を行った。

６月下旬　　作業員を追加雇用した。調査区北東隅から竪穴建物跡を検出したため、文化財保護課と事業者との協議により調査範囲を拡張した。

７月上旬　　竪穴建物跡の精査を行った。第Ⅲ層の調査を終了し、第Ⅳ層の調査を行った。２日に発掘調査に係る鑑定等の指導を調査員から受けた。また、10日に遺跡・遺構の空中写真撮影を行った。

７月17日　　発掘調査機材等の片付け･清掃を行い、器材･出土遺物等を県埋蔵文化財調査センターへと搬送し、すべての作業を終了した。

２　整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は令和３年４月１日から令和４年３月31日までの期間で行った。発掘調査では段ボール箱換算で４箱の土器類、石器類、鉄生産関連遺物、陶磁器が出土した。このことから、これらに応じた整理作業の工程を計画した。報告書は遺構や遺物の数に応じた分量を各々の記載にあてることにした。

整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

４月　　石器の分類と選別を行った。

５月　　土器・石器の数量計測を行い、遺構内出土土器から接合作業を行った。

６～７月　　接合･復元が進んだ土器の選別を行い､採拓と断面実測を行った｡礫石器の実測を行った。

８～９月　　土器・礫石器のトレースを行った。

10月　　土器・石器以外の遺物の選別を行った。遺構図の調整を開始した。

11月　　剥片石器の実測図作成とトレースを行った。資料化が完了したものから、各種図版作成作業と共に報告書掲載遺物観察表の作成を行った。また､遺物の写真撮影を行うとともに、報告書の原稿執筆を開始した。

12月～　　原稿・版下が揃ったので報告書の割付・編集作業を行い、印刷業者を入札・選定し、契約事務を完了した。

１月～　　遺物写真図版を作成し、印刷業者へ原稿及び版下を入稿した。

２月～　　校正、及び出土遺物・記録類の整理を行った。

３月16日　　３回の校正を経て、報告書を刊行した。

３月下旬　　記録類、出土遺物等を整理して収納した。

（平山）

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡

上野平遺跡は下北半島南西端の牛ノ首岬から北東に約11㎞、むつ市役所川内庁舎から南西に６㎞程の地点に位置し、陸奥湾に注ぐ宿野部川右岸の段丘面上標高約９ｍに立地する。

遺跡の所在するむつ市川内町は、平成17年（2005）にむつ市に合併するまでは下北郡川内町であった。大正６年（1917）年に町制施行する前は川内村で、これは明治22年（1889）に川内村・桧川村・蠣崎村・宿野部村が合併して出来たものである。遺跡が所在するのはこの旧宿野部村である。これらの村は、近世は盛岡藩の田名部通の西通に属していた。一方、北前船によって北海道・北陸・関西とも繋がっていた。上野平遺跡の北東約300ｍに所在する金七五三（かねしめ）神社には、記銘から明治以降に金沢から運ばれて来た事が分かる狛犬が残されているほか、宿野部には遠見番所も置かれていた(註１)。ちなみに、宿野部という地名はアイヌ語起源という説がある(註２)。

むつ市内には184の遺跡が登録されている。うち、旧川内町内に所在するものは44遺跡で、図１に本遺跡を含む旧川内町の33遺跡を示した。これらは陸奥湾に臨む海成段丘上に位置しているものが多い。この地域では、今まで発掘調査がほとんどなかったため、各遺跡の詳細は明確ではないものの、弥生時代や中世の遺跡が注目されてきた。時代別にみると、旧石器時代では後期旧石器時代の彫器が採集されているものの、この時代の詳細は不明である（江坂1967・齋藤2004ほか）。縄文時代では早期前葉（日計式期）から遺跡が出現し、遺跡数は縄文時代前期に増加、中期に減少、後期に増加し晩期まで続く。弥生時代は遺跡数が比較的多いのが当地域の特徴である。奈良時代は当該期の遺跡がないため不明である。平安時代は擦文土器や製塩土器の出土が注目される。中世では蠣崎城跡・鞍越遺跡等が知られている。

上野平遺跡は、過去に資料紹介や発掘調査が複数回行われている。昭和48年（1973）に擂鉢を被った人骨が発見された（森本・橘1974）。次いで昭和51年（1976）に寺田徳穂氏が遺跡内で採取された擦文土器・土師器・縄文土器を資料紹介した（寺田1976）(註３)。また、同年に橘善光氏が発掘調査を行い、製塩カマド跡や礫群遺構を検出し、土師器・擦文土器・製塩・土製支脚・砥石・鉄製品が出土した（橘・奈良1977）。令和元年（2019）本事業に先立って実施された試掘調査では焼土遺構が検出され、範囲変更が行われた。

今回の調査区は国道338号線の北に隣接した幅23ｍ・長さ70ｍ程の長方形に、中央南が三角形状に突出した形をしている。標高は8.5ｍ前後で、調査区内はほぼ平坦であるが、南西から北東にむかって緩やかな傾斜がある。現況は畑である。調査区の北西は、昭和51年に行われた調査範囲と重なる（第５章第２節参照）。なお、西通（蠣崎道）は調査区の北側を通っていたと考えられる(註４)。

（平山）

（註１）旧宿野部小学校前のグランド辺りと推定される（青森県教育委員会1986）。

（註２）菅江真澄は「めくら河といふ小河わたりて宿野部（スクノヘ）に来けり。こゝを、むかしは夷人の、スクノベツとかいひたる。」（『於久野宇良く』）と記している。シュプノッペ（shupun-ot-pe：ウグイ・多くいる・者（川））と推測される。同音の「宿野辺川」が北海道亀田郡七飯町にある。

（註３）「付近に寺院があり、その東側の地点から採集した」とある。本遺跡直近の寺院は遺跡の東に所在した旧地蔵院であるが、遺跡範囲外にあたるため本遺跡ではない可能性もある。

（註４）遺跡周辺での聞き取りや青森県教育委員会1986による。

表１　上野平遺跡と周辺の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時代												種別	備考
		縄文						弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世		
		草	早	前	中	後	晩								
208095	隠里遺跡					○								散布地	
208096	熊ヶ平（1）遺跡			○	○	○		●						集落跡	
208097	**上野平遺跡**			○							○	○		**集落跡**	
208100	田野沢（1）遺跡						○		○	○	○			集落跡	
208101	楢木平（1）遺跡					○		○						散布地	
208102	楢木平（2）遺跡					○								散布地	
208103	上野松山遺跡						○							散布地	
208104	勘七沢遺跡						○							散布地	
208105	葛沢遺跡			○			○							散布地	
208106	桧川川代遺跡			○		○		○						散布地	
208107	蛎崎寺ノ前遺跡			○		○					○			散布地	
208109	蛎崎苗畑遺跡			○		○								散布地	
208111	桧川野泉遺跡			○		○								散布地	
208113	蛎崎合野遺跡			○		○			○					散布地	
208114	高野川（1）遺跡													配石機構	縄文時代
208115	邪馬尻遺跡							○						散布地	
208116	不備無遺跡						○							散布地	
208117	蠣崎城跡											○	○	城館跡	
208120	鞍越遺跡			○	○	○		○				○	○	散布地	
208121	高野川（2）遺跡		●		●	●		●				○		集落跡	縄文時代
208122	石倉沢遺跡													散布地	縄文時代
208123	高野川（3）遺跡		●	●	●	●	●	●			○	●		散布地	縄文時代
208125	田野沢（2）遺跡													散布地	縄文時代
208126	熊ヶ平（2）遺跡							○			○			散布地	縄文時代
208127	袋川（2）遺跡													散布地	縄文時代
208128	袋川（3）遺跡													散布地	縄文時代
208129	板子塚遺跡			●		●	●	○						散布地	縄文時代
208130	釜谷遺跡					○								散布地	
208131	蛎崎遺跡										○			生産遺跡	
208132	楢木平（3）遺跡							○					○	散布地	
208133	桧川遺跡							○						散布地	
208134	熊ヶ平（3）遺跡						○	○			○			散布地	
208137	香ノ木遺跡					○	○							散布地	

●：青森県教育委員会が調査した遺跡で、調査結果から加筆した時代。

図１　遺跡位置図

0　1,000　2,000　3,000　4,000m

1/50,000

電子地形図 25000（国土地理院）を加工して作成

第２節　上野平遺跡及び周辺の地形・地質について

弘前大学大学院理工学研究科　根本 直樹

１　上野平遺跡の位置と周辺の地形の概要

上野平遺跡は、むつ市川内町宿野部に位置する。地形的には、陸奥湾に面した海成段丘面に載る（図２）。標高は８～15mである。

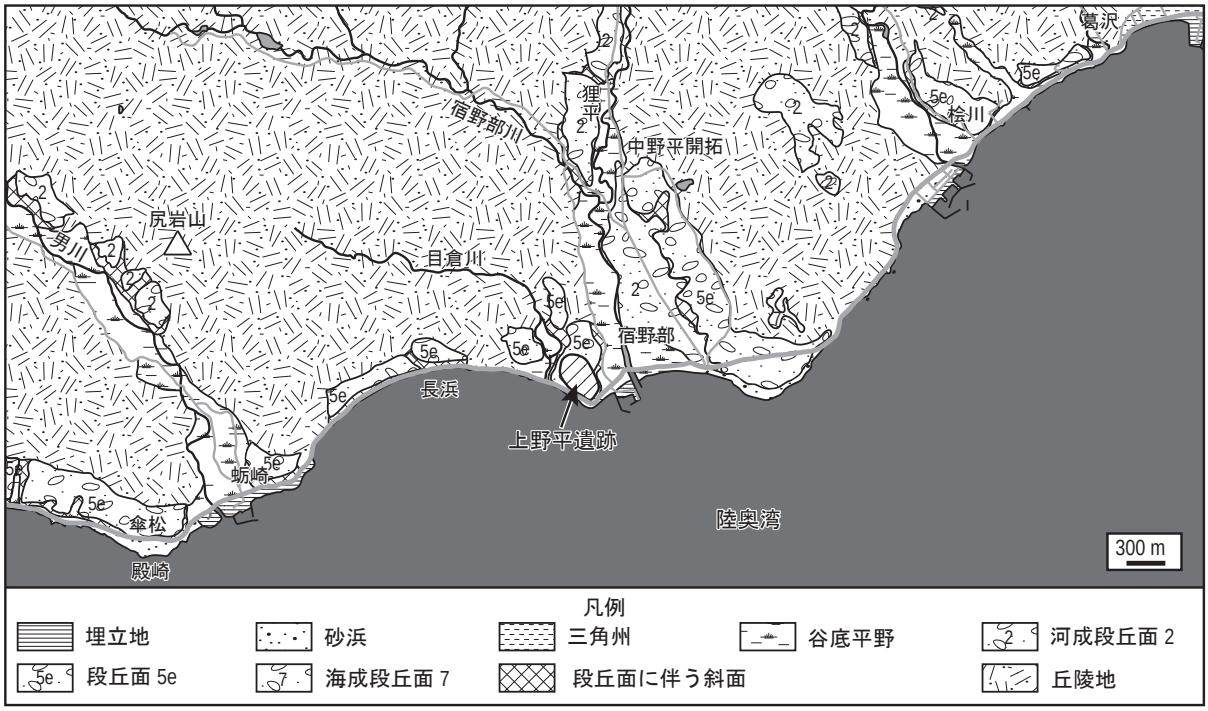


図２　上野平遺跡周辺の地形分類図

上野平遺跡周辺の地形を概観すると、陸奥湾沿いに海成段丘面が発達し、その背後に丘陵地が広がる。一方海成段丘面の前面には、砂浜または埋立地が分布する。また、主要河川に沿って、谷底平野が狭長に分布し、一部では河成段丘面を伴う。本稿では段丘面を上位から、海成段丘面７、段丘面5e、及び河成段丘面２に細分する。

丘陵地は、水野・堀田（1998）の脇野沢丘陵に相当する。上野平遺跡の北方に広がる。標高は300m以下で、大局的には南に向かって標高を減じる。起伏量は100～200 m/㎢である。

海成段丘面７は、小池・町田（2001）のmT_7の一部に相当する。宿野部東方に小規模に分布する。標高は40～50mである。酸素同位体ステージ７（243,000～191,000年前；https://lorraine-lisiecki.com/ LR04_MISboundaries.txt, 2021年11月25日閲覧）に形成された。

段丘面5eは、水野・堀田（1998）の中位の下位面及び小池・町田（2001）のmT_{5e}及びfT_{5e}にほぼ相当する。海岸に沿って良く発達するほか、宿野部川下流左岸では宿野部から中野平開拓付近まで分布する。面の標高は10～40mで、海に向かってやや傾く。酸素同位体ステージ5e（約 123,000 年前；https://lorraine-lisiecki.com/LR04_MISboundaries.txt, 2021年11月21日閲覧）に形成された海成

段丘面及びそれに連続する河成段丘面である。

河成段丘面２は、水野・堀田（1998）の低位面の一部、小池・町田（2001）のfT_2に相当する。男川、宿野部川、檜川やその支流に沿って断続的に分布する。段丘面の標高は海岸付近では５ｍ程度であるが、上流域では60ｍを超える。最終氷期に形成された河成段丘面である。

段丘面に伴う斜面は、段丘面間の段丘崖、海食崖、及び段丘面を侵食した河谷の斜面を含む。段丘崖はその付け根の段丘面の形成時期に形成された。海食崖及び河谷の斜面は現在も形成過程にある。

谷底平野は、水野・堀田（1998）の谷底平野に相当する。男川、宿野部川、檜川などの主要河川に沿って狭長に分布する。

三角州は、水野・堀田（1998）の三角州に相当する。葛沢東方に見られる。

砂浜は、水野・堀田（1998）の砂浜に相当する。殿崎周辺、宿野部東方、檜川河口西方の海岸に狭長に分布する。

埋立地は、水野・堀田（1998）の埋立地に相当する。蛎崎周辺の海岸、宿野部漁港、桧川漁港、川内漁港がこれに当たる。

上野平遺跡周辺の主要河川は、北西から南東へ流下する（図３）。下北半島西部の地質は、佐井村の長後から福浦にかけてを中心とする半ドーム構造をなす。本地域はその中心から南東方向に位置するため、北西－南東方向の流路が卓越すると解釈される。なお、丘陵地における水系は枝状水系で、丘陵地を形成する地質に顕著な定向性がないことを示唆する。段丘面上及び谷底平野の流路はまばらであり、水系は不明瞭である。

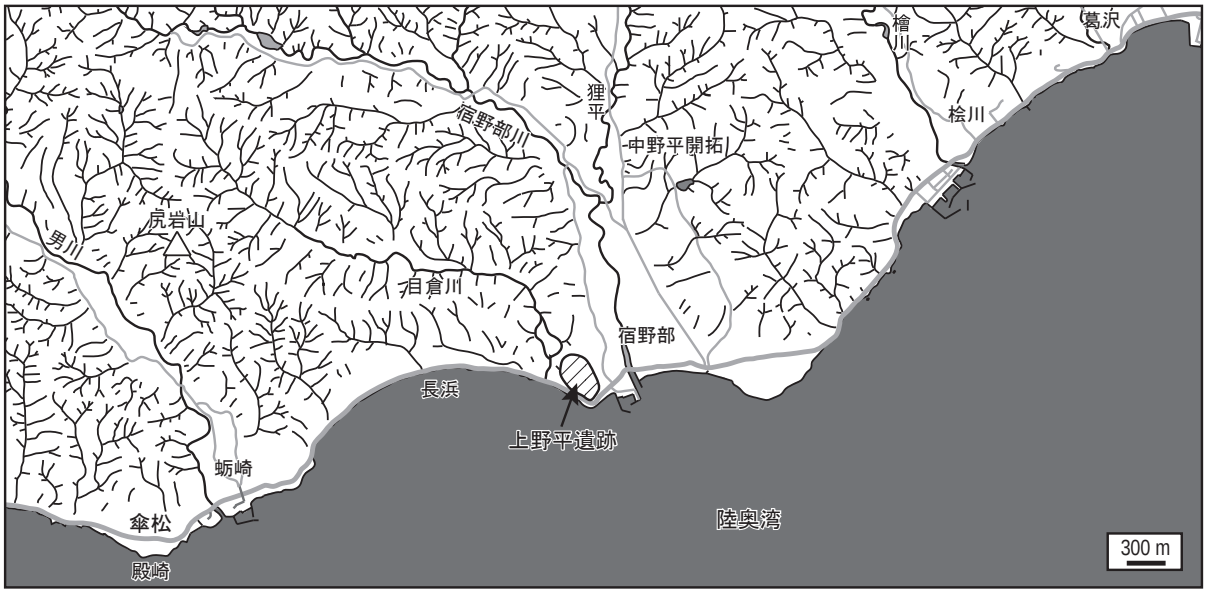


図３　上野平遺跡周辺の水系図

２　上野平遺跡周辺の地質

上野平遺跡北方の丘陵地には新第三系が広く分布する（図４）。それらはほぼ東西の走向をもち、南に緩傾斜する。下位より檜川層、小沢層、川内層、及び脇野沢安山岩類に区分される。また、川内層以下を貫くデイサイトの貫入岩が見られる。海岸沿いではこれらを段丘堆積物が覆い、主要河川と海岸には沖積層が分布する。

檜川層は、桑野（1958）により命名された。上村（1975）及び根本（1998）の檜川層、根本・鎌田（1999）の桧川層に相当する。層厚は500～730mである。宿野部川より西の丘陵地に分布する。主に流紋岩～デイサイト質火山岩類及びそれに伴う火砕岩から成る。火砕岩の殆どは緑淡緑色を呈する火山礫凝灰岩、凝灰角礫岩、軽石凝灰岩等である。凝灰質泥岩及び黒色の泥岩を挟む。7.58±0.18Maの全岩K-Ar年代が得られている（資源エネルギー庁、1995）。

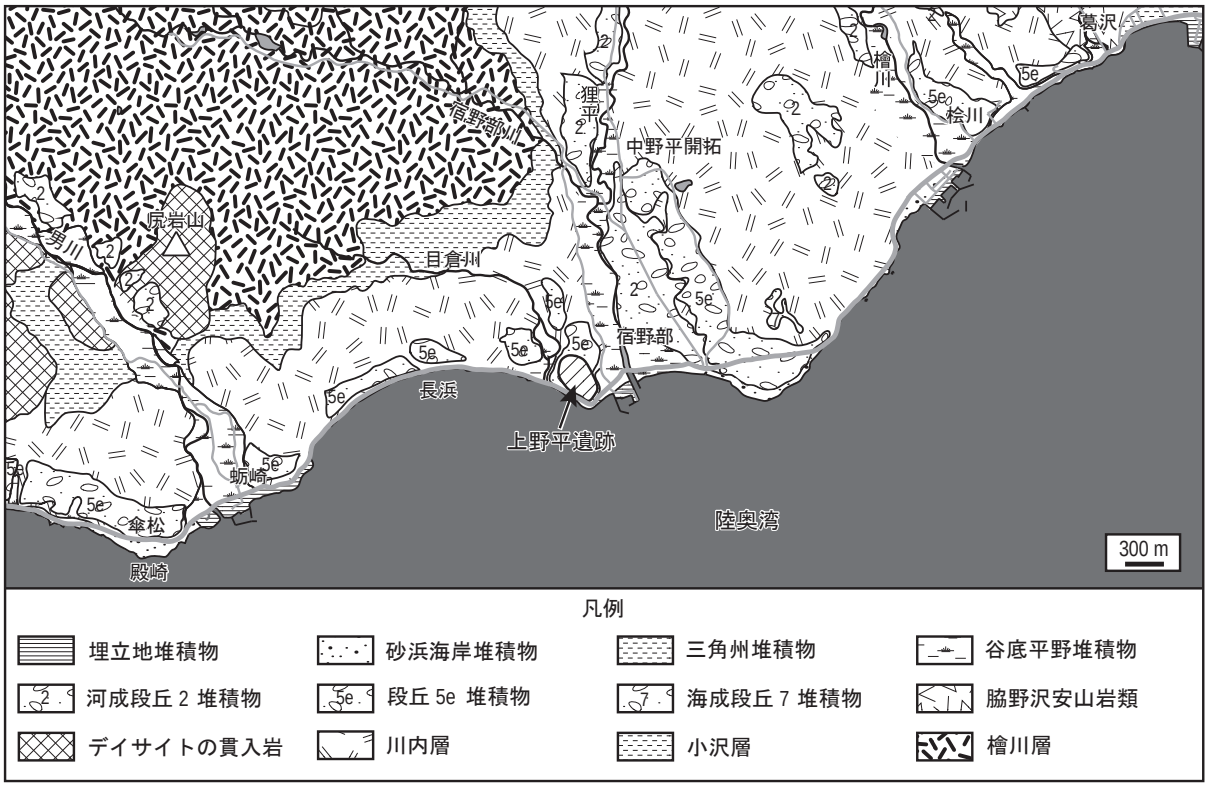


図４　上野平遺跡周辺の地質図

小沢層は、北村ほか（1959）により命名された。上村（1975）、根本（1998）、根本・鎌田（1999）の小沢層に相当する。宿野部川より西の丘陵地で、桧川層を囲むように分布する。層厚は約150mである。黒色の泥岩を主体とし、珪質で硬質なものと軟質なものが互層を成す。東方に向かって次第にシルト岩となり、目倉川流域では軽石凝灰岩を挟む。檜川層を整合に覆うが、一部では檜川層最上部と指交する。

川内層は、金属鉱物探鉱促進事業団（1969）により命名された。上村（1975）、根本（1998）、根本・鎌田（1999）の川内層に相当する。上野平遺跡周辺の丘陵地に広く分布する。デイサイト質の火砕岩を主体とし、礫岩、砂岩、シルト岩を挟む。下位の小沢層とは整合・一部不整合の関係にある。

脇野沢安山岩類の名称は、北村ほか（1959）の脇野沢安山岩質集塊岩に由来する。上村（1975）、根本（1998）、根本・鎌田（1999）の脇野沢安山岩類に相当する。葛沢周辺に小規模に分布する。層厚は500mを超える。デイサイト～安山岩質火山角礫岩、凝灰角礫岩及び火山礫凝灰岩を主体とし、安山岩溶岩、凝灰質砂岩、シルト岩等を挟む。資源エネルギー庁（1995）により8.41±1.01Maの全岩K-Ar年代が報告されている。小沢層を整合に覆う。

デイサイトの貫入岩は、尻岩山周辺の男川流域に見られ、檜川層及び小沢層を貫く。灰白色を呈し、

斜長石、石英、黒雲母、角閃石の斑晶が認められる。

以下に、段丘堆積物及び沖積層について記述する。それらの分布は対応する地形の分布に等しいので、記述を省略する。沖積層は、谷底平野堆積物、三角州堆積物、及び砂浜海岸堆積物から構成される。

海成段丘７堆積物は、根本・鎌田（1999）の宿野部段丘堆積物の一部に相当する。下部は風化が進んだ礫層で構成され、それを厚さ２ｍ以上の風成層が覆う。

段丘5e堆積物は、根本・鎌田（1999）の川内段丘堆積物にほぼ相当する。下部は主に安山岩の亜円礫から成る礫層から構成され、それを明黄灰色を呈する粘土層及び赤褐色の風成層が覆う。厚さは５ｍ以下である。

河成段丘２堆積物は、根本・鎌田（1999）の永下段丘堆積物にほぼ相当する。礫層及び砂質粘土層から成る。礫は新第三系の火砕岩に由来する中亜円礫である。厚さは数ｍである。樹木片を含むことがある。

谷底平野堆積物は、根本・鎌田（1999）の沖積低地堆積物の一部に相当する。砂層、礫層、及び泥層から成る。

三角州堆積物は、根本･鎌田（1999）の沖積低地堆積物の一部に相当する。砂層及び泥層から成る。

砂浜海岸堆積物は、主に淘汰の良い砂から構成される。泥層や細礫層を挟むことがある。

埋立地堆積物は、人為的に搬入された土砂から構成される。

引用文献

金属鉱物探鉱促進事業団　1969 『昭和43年度広域調査報告書「下北地域」』通商産業省　24p.

資源エネルギー庁　1995 『平成６年度広域地質構造調査報告　渡島大島･下北地域』資源エネルギー庁　107p.

上村不二雄　1975 『５万分の１地質図幅及び説明書「陸奥川内」』地質調査所　39＋7p.

小池一之・町田　洋編　2001 『日本の海成段丘アトラス』東京大学出版会　122p.

北村　信・鈴木養身・多田元彦　1959 『下北半島西部の地質』青森県商工課　p. 1-11.

桑野幸夫　1958 「下北半島北部の地質」『資源科学研究所彙報』no. 46-47　p. 28-37.

水野　裕・堀田報誠　1999 「地形分類図」『土地分類基本調査「陸奥川内・脇野沢」』青森県農林部農村計画土課　p. 11-16.

根本直樹　1998 「下北地域」『青森県の地質』青森県観光労働部鉱政保安課　p. 60-67.

根本直樹・鎌田耕太郎　1999 「表層地質図」『土地分類基本調査「陸奥川内・脇野沢」』青森県農林部農村計画課　p. 17-39.

第３節　上野平遺跡の基本土層

基本土層は７層に分層した。層序の残りが良い調査区北西で実測図を示し、作図地点は遺構配置図に記した。調査時の所見について説明する。

第Ⅰ層　10YR3/2　黒褐色土

表土。畑の耕作土で、草木根が発達し、しまりなく柔らかい。層厚は20～30㎝である。地表近くの草木根が厚い部分に関しては、第Ⅰａ層と細分した箇所もある。

第Ⅱ層　10YR1.7/1　黒色土

縄文時代～古代の遺物包含層。草木根やしまりややあり。層厚は20～30㎝である。ほどんどの遺構は第Ⅰ層除去後の本層上面で検出した。昭和51年調査で遺物や遺構が検出された第Ⅰ層下部に相当すると考えられる。

第Ⅲ層　10YR2/1～10YR4/3　黒色～にぶい黄褐色土

漸移層。10YR5/6 黄褐色軽石（φ１～７㎜）が２％混入する。しまりあり。層厚は30～40㎝である。層上位の色調は黒色が強く、層下位は黄褐色が強い。昭和51年調査の第Ⅱ層に相当すると考えられる。第１号竪穴建物跡は本層上面で検出したが、断面観察で第Ⅱ層から掘り込んでいた。

第Ⅳ層　10YR5/6　黄褐色ローム

酸化鉄粒（φ２～10㎜）が１％混入する。粘性は強い。第Ⅴ層とは不整合である。昭和51年調査の第Ⅲ層に相当すると考えられる。

第Ⅴａ層　10YR7/6　明褐褐色ローム

酸化鉄粒（φ２～10㎜）が１％、マンガン粒（φ～１㎜）が１％未満混入する。粘性あり。第Ⅴｂ層とは漸移的で、層下部ほど色調が白く、かつ、粘性が弱くなる。

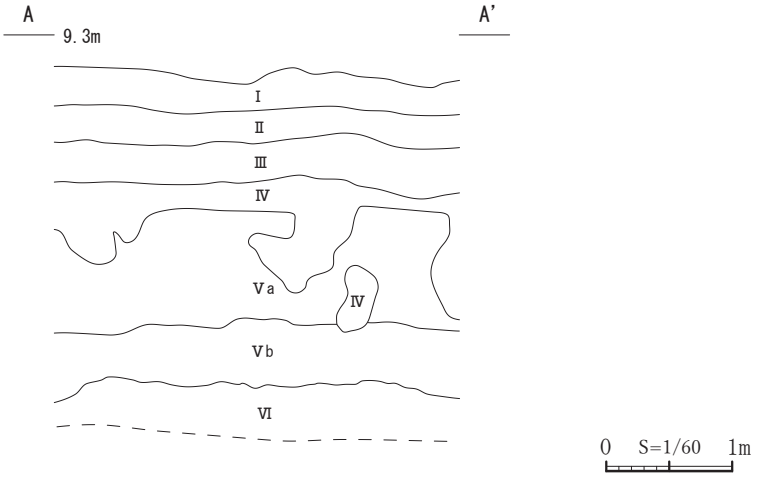
第Ⅴｂ層　10YR7/6 ～ 10YR8/4　明褐褐色～浅黄橙色ローム

酸化鉄粒（φ10㎜前後）が１％、マンガン粒（φ～１㎜）が１％未満混入する。粘性あり。層下部ほど色調が白く、粘性が強まる。酸化鉄粒は層下部に目立ち、一部は層状である。酸化鉄粒は草根痕跡の可能性がある。

第Ⅵ層　10YR8/3～10YR7/8　浅黄橙色～黄橙色砂

段丘５ｅ堆積物の上部に相当する層と思われる。酸化鉄を挟み、層上部の浅黄橙色砂と層下部の黄橙色砂が不整合に重なる。ともにラミナが水平に観察される。

（平山）



基本土層

第Ⅰ層	10YR3/2	黒褐色土	耕作土。草木根発達。しまりなく柔らかい。
第Ⅱ層	10YR1.7/1	黒色土	縄文時代～古代の包含層。草木根ややあり。
第Ⅲ層	10YR2/1～10YR4/3	黒色～にぶい黄褐色土	漸移層。10YR5/6黄褐色軽石(φ1～7mm)2%。しまりあり。層上位は黒色が、下位は黄褐色が強い。
第Ⅳ層	10YR5/6	黄褐色ローム	酸化鉄(φ2～10mm)1%。粘性強。第Ⅴ層とは不整合。
第Ⅴa層	10YR7/6	黄橙色ローム	酸化鉄(φ2～10mm)1%。マンガン粒(φ～1mm)1%未満。粘性あり。第Ⅴb層とは漸移的。
第Ⅴb層	10YR7/6～10YR8/4	黄橙色～黄橙色ローム	酸化鉄(φ10mm前後・草根痕跡か？層下部に目立ち一部は層状)1%。マンガン粒(φ～1mm)1%未満。粘性あり。下部ほど色調が白く粘性が強まる。
第Ⅵ層	10YR8/3～10YR7/8	浅黄橙色～黄橙色砂	基盤層か。酸化鉄を挟み浅黄橙色の上部と黄橙色の下部が不整合に重なる。ともにラミナが水平に観察される。

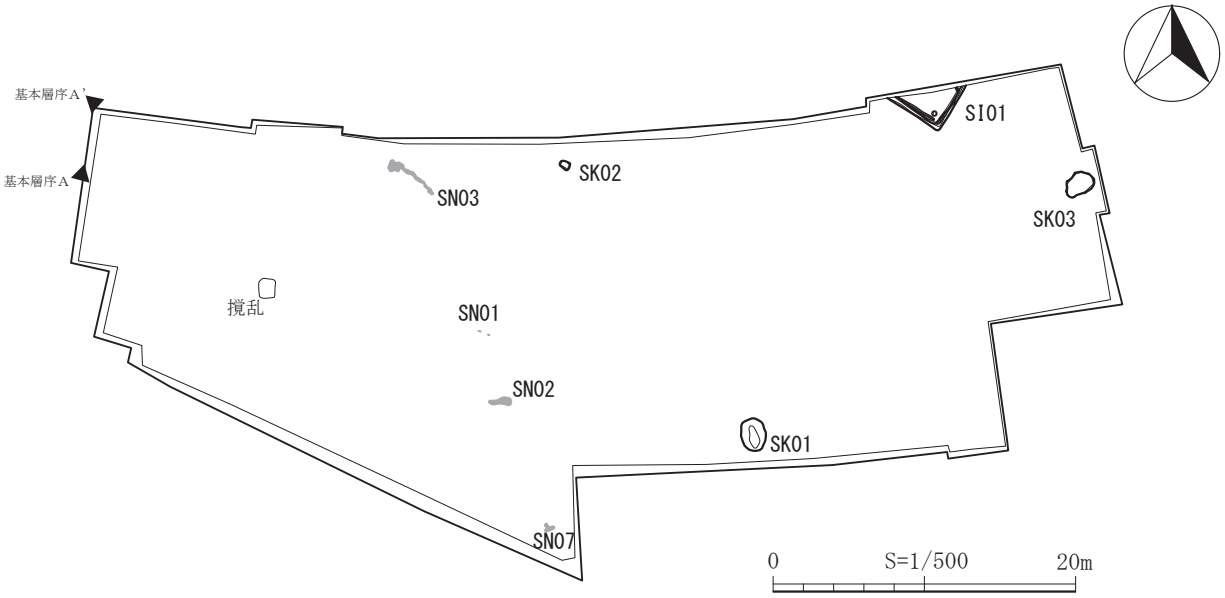


図５　基本土層図

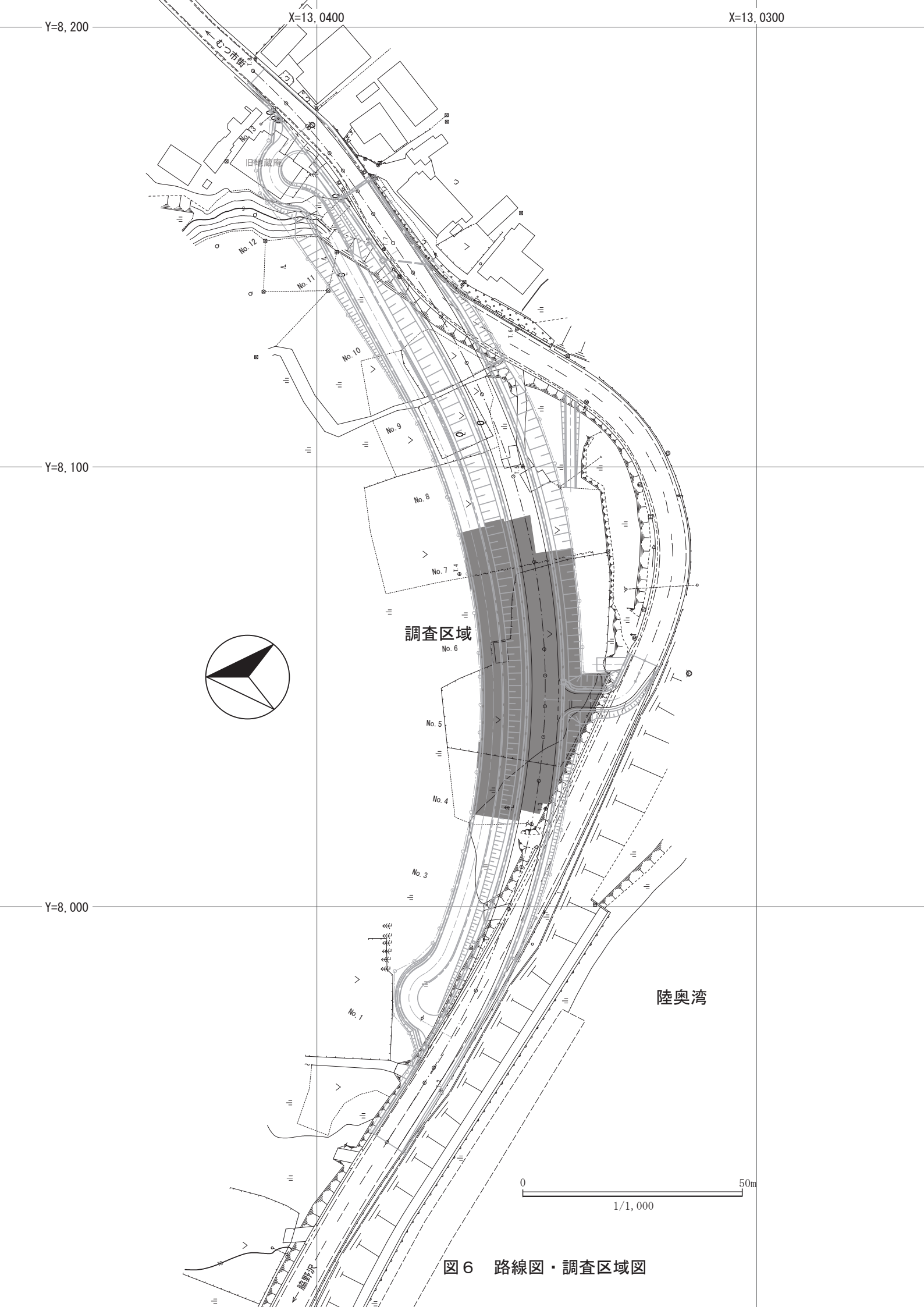
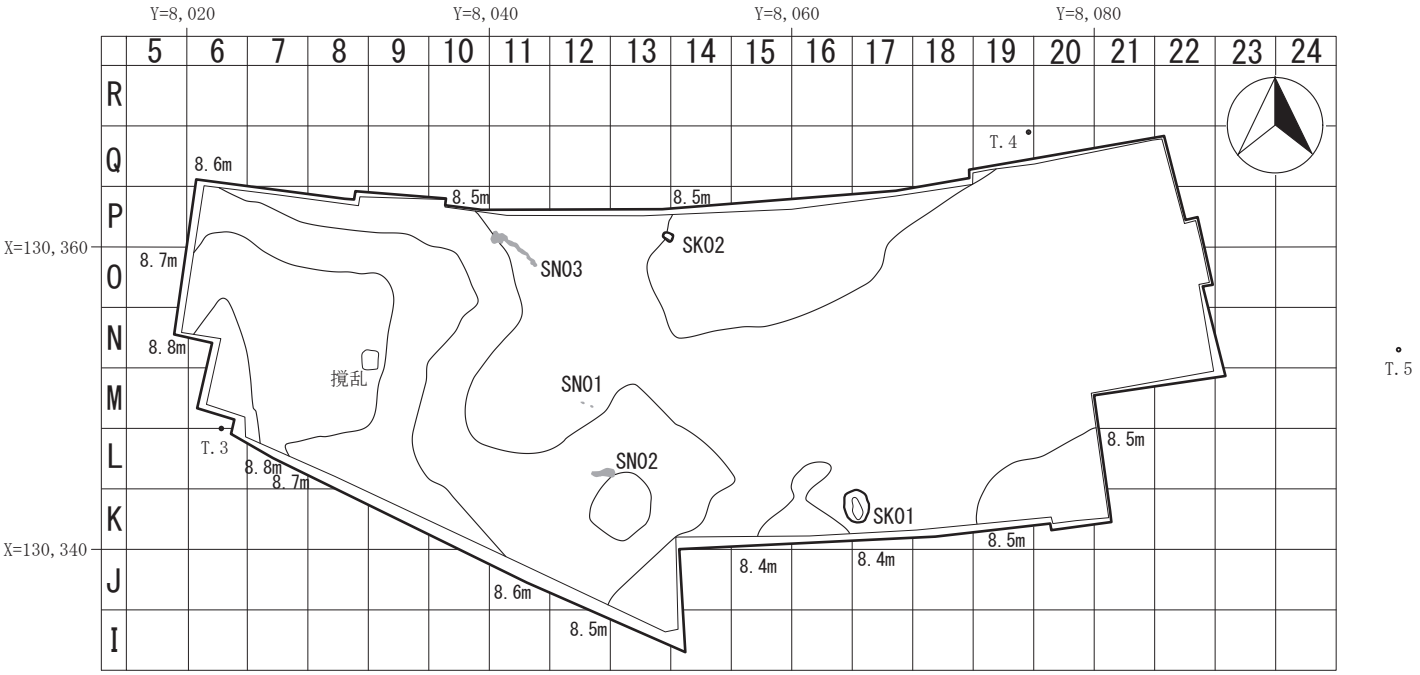
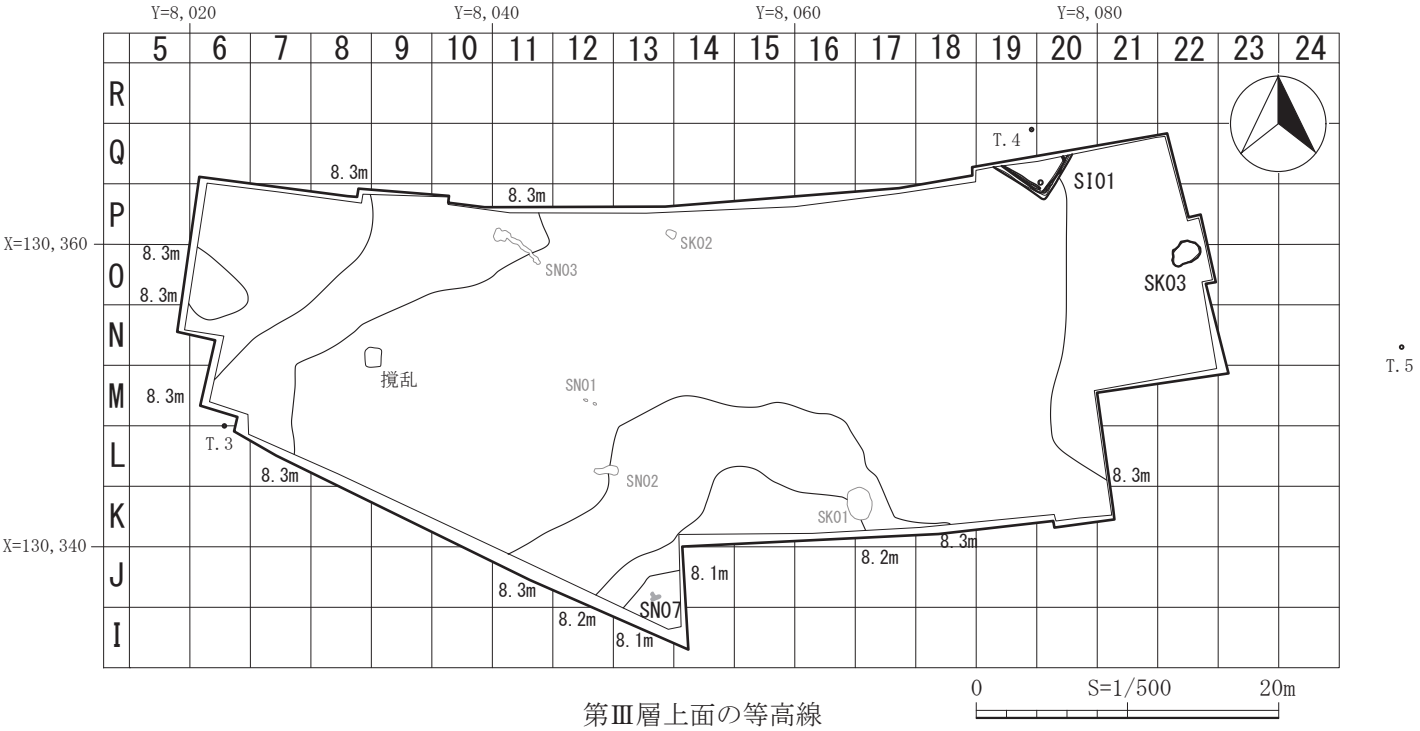

X=13,0400
X=13,0300
Y=8,200
Y=8,100
Y=8,000
←むつ市街
旧物置庵
No.13
No.12
No.11
No.10
No.9
No.8
No.7
No.6
No.5
No.4
No.3
No.1
調査区域
陸奥湾
0
50m
1/1,000
←脇野沢

図６　路線図・調査区域図



第Ⅱ層上面の等高線



第Ⅲ層上面の等高線

点名	国土座標値(JDG2011)		標高値(m)	備考
	X	Y		
T.3	130,347.997	8,022.275	9.375	既設基準点
T.4	130,367.593	8,075.653	8.663	既設基準点
T.5	130,353.207	8,100.133	8.541	既設基準点

図７　遺構配置図

第３章　検出遺構と出土遺物

第１節　概要

調査区は国道338号線の北に隣接した幅23m・長さ70m程の長方形に、中央南が三角形状に突出した形をしている。標高は8.5m前後で、調査区内はほぼ平坦であるが、南西から北東にむかって緩やかな傾斜がある。現況は畑である。調査区の北西は昭和51年に行われた調査範囲と重なる（第５章第２節参照）。

今回の調査では平安時代の竪穴建物跡１棟と土坑１基、平安時代以降の土坑２基・焼土遺構４基を確認し、遺物は縄文時代・平安時代・近世の土器・石器・土製品・鉄生産関連遺物等が段ボール箱で４箱分出土した。遺構は調査区中央もしくは東端で検出した。遺物は調査区北西部から出土したものが多い。これは昭和51年調査区の埋戻し土に混入していたものである。

以下、遺構と遺物について個別に記述する。

第２節　検出遺構と出土遺物

１　竪穴建物跡（図８～10、写真４～６・12）

調査区北東端から１棟検出した。建物跡の北側約半分程度が調査区域外にあるため、建物跡全体の輪郭は不明である。調査着手時は１棟の竪穴建物跡として認識していたが、当初検出した建物跡のプランの内側に、焼土や炭化物を直線状に検出したことや土層断面観察等から、本建物跡は造り替えられていることが判明し、新期をSI01（新）、古期をSI01（旧）とした。検出範囲では、SI01（新）の規模はSI01（旧）より小さく、SI01（旧）の中に入子状に構築している。

第１号竪穴建物跡（新）（SI01（新））（図８・９、写真４～６・12）

【位置・確認】調査区北東端のP・Q-19・20グリッドに位置する。

【平面形・規模】建物跡の北側約半分程度が調査区域外にあるが、平面形は長辺3.2m以上・短辺約2.7mの長方形をなすものと推定される。壁長は南西壁で（3.2）m、南東壁で2.7mを測る。確認面から床面までの深さは南西壁で31cm、南東壁で26cmである。南東壁はほぼ垂直に、南西壁・北東壁は外傾しながら立ち上がる。建物跡の軸方位は、カマドが北東壁にあるとすればN-36°-E、北西壁にあるとすればN-56°-W前後と推定される。

【床面・壁面】検出範囲では、床面は全面に掘方を有し、床を貼って平坦に整えている。南隅から建物跡中央にかけて硬化範囲が認められた。壁溝は南西壁と北東壁で確認でき、南西壁では幅24cm、深さ17～31cm、北東壁では幅12cm、深さ16～19cmである。

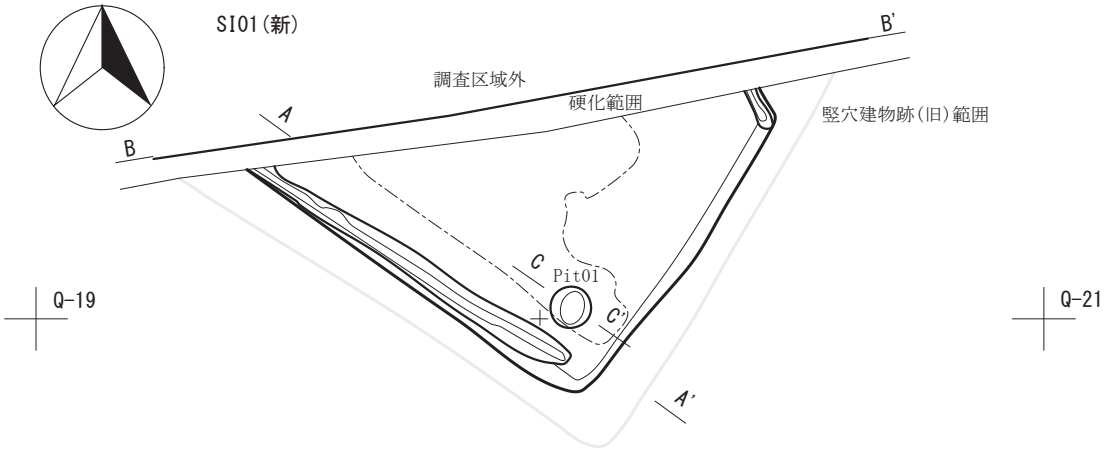
【堆積土】黒褐色土主体で６層に分層した。第５層は壁溝・第６層は掘方埋土である。床面直上の第４層は焼土・炭化物が多量に混入する。人為的に埋め戻されたものと思われる。

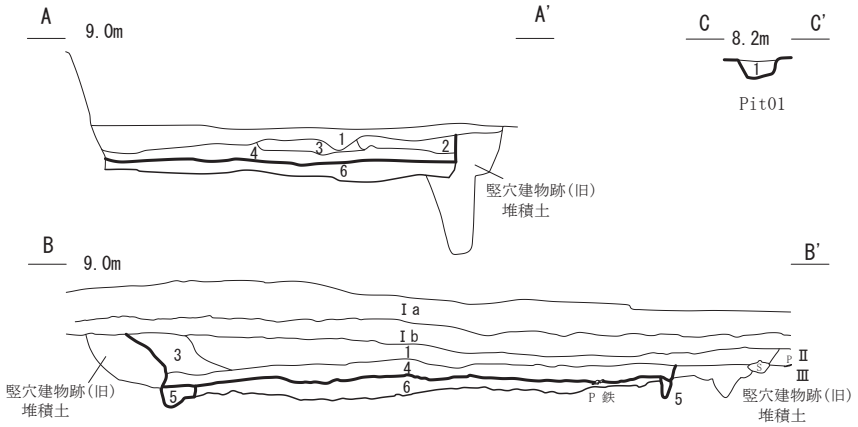
【カマド】検出した建物範囲内には確認できなかった。調査区外に延びる竪穴建物跡北東壁もしくは北西壁に作られているものと推定される。

【柱穴】南隅から１基検出した。主柱穴と考えられる。径33cmの円形で、床面からの深さは16cmを測る。堆積土は暗褐色土の単層でしまりがないため、柱は抜き取られたものと推測される。

【出土遺物】土師器、石器、鉄生産関連遺物が主に床面から出土した。土師器は2,375.8ｇ出土し、うち９点（2,206.7g）図示した。１・２は坏である。１はロクロ形成の坏である。復元図示しなかったが、口径は11.2㎝と推定される。器壁も薄く、小振りである。２は建物跡南隅から出土した。内面が黒色処理され、内面には斑状に・外面には帯状に炭化物が付着している。付着炭化物について、放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体を行ったところ（第４章第２節参照、土器内面：PLD-45895・試料№.１/土器外面：PLD-45896・試料№.２）、５世紀前葉～６世紀末葉の年代と、C_3植物に近いもしく草食動物とC_3植物との分析結果が得られた。３～９は甕である。３は口縁部～胴部、４・５は口縁部、６～８は胴部、９は底部である。器面調整は、外面はケズリ・内面はナデが卓越する。３は建物跡東隅付近から出土した。底面以外ほぼ復元できた。底部に向かって急激にすぼまる器形である。口縁部の内外面に煤の付着が、内面に被熱痕跡が認められる。８はロクロ形成のものである。９の外底面はケズリ調整である。４は顕著に被熱しており、製塩土器の可能性がある。石器は砥石が１点（16.9ｇ）出土した（10）。礫面の１面を使用面としたもので、石材は凝灰岩である。鉄生産関連遺物は４点（134.7ｇ）出土した。11は板状の鉄製品・12・13は鉄滓、14は羽口溶解物と思われる。12の表面は赤褐色を呈し、上面は比較的平坦で、下面は半球状を呈する。内面は全体に密で重みがある。碗形滓である。13の表面は赤褐色と灰白色が混在し、上面は比較的平坦で、断面は半円状を呈する。全体に密で重みがある。炉内流動滓と思われる。その他カマドの芯材と思われる被熱礫が９点2,155.6ｇ出土した。一部を写真12に掲載した。石材は、石英が重量比で68.54％（1,477.5g）、珪質頁岩18.03％（388.7g）、デイサイト11.00％（237.1g）、凝灰岩2.43％（52.3g）である。カマド構築材と思われる焼成粘土が237.1g出土した。床面からは焼土・炭化物が多量に出土している。焼土は建物跡南隅から南西壁の壁溝に沿って５～20㎝程の幅の帯状の広がりで確認できた。また、長さ５～10㎝、幅５㎝程の板状の炭化物が同様の範囲に散在していた。

【小結】遺構の形態、遺構の重複関係、出土遺物などから、平安時代の遺構である。火災により倒壊した焼失建物跡と判断されるが、火災が建物の廃棄を意図したものかは不明である。本建物跡床面から出土した坏（２）付着炭化物の分析結果からは、出土土器から想定される時期よりもかなり古い年代が得られたが、海産物の影響は受けていないことから、火災の際に土器に付着した建築部材による古木効果の可能性がある。10世紀中葉以降に構築された建物跡と考えられる。





SI01(新)

1層　10YR3/1　黒褐色土　5YR5/6明赤褐色焼土粒(φ2～5mm)3%。ローム粒(φ5mm)1%。10YR4/3にぶい黄褐色土粒(φ1～3mm)2%。
2層　10YR3/2　黒褐色土　炭化物粒(φ1mm)1%。10YR4/3にぶい黄褐色土粒(φ3～10mm)3%。
3層　10YR3/3　暗褐色土　5RY5/6焼土粒(φ1mm)3%。10YR4/3にぶい黄褐色土粒(φ10～30mm)3%。
4層　10YR2/2　黒褐色土　焼土粒(φ2～20mm)5～30%。炭化物粒(φ5～10mm)5%。
5層　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒(φ1～3mm)7%。
6層　10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック(φ10～100mm)5%。焼土粒(φ1～5mm)3%。炭化物粒(φ1mm)3%。SI01(新)の貼床。

SI01(新) Pit01

1層　10YR3/4　暗褐色土　焼土粒(φ2mm)3%。ローム粒(φ3～10mm)7%。10YR3/2黒褐色土粒(φ10mm)2%。しまりなし。柱抜取穴。

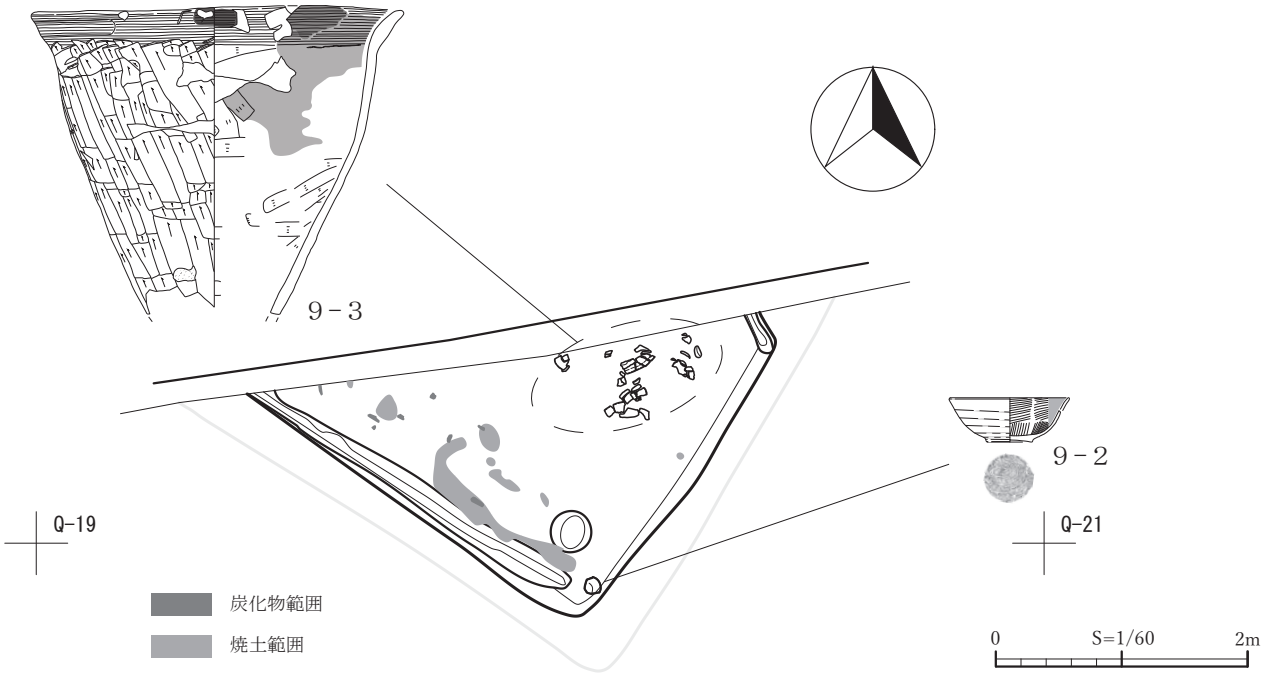


図８　第１号竪穴建物跡(新)(１)

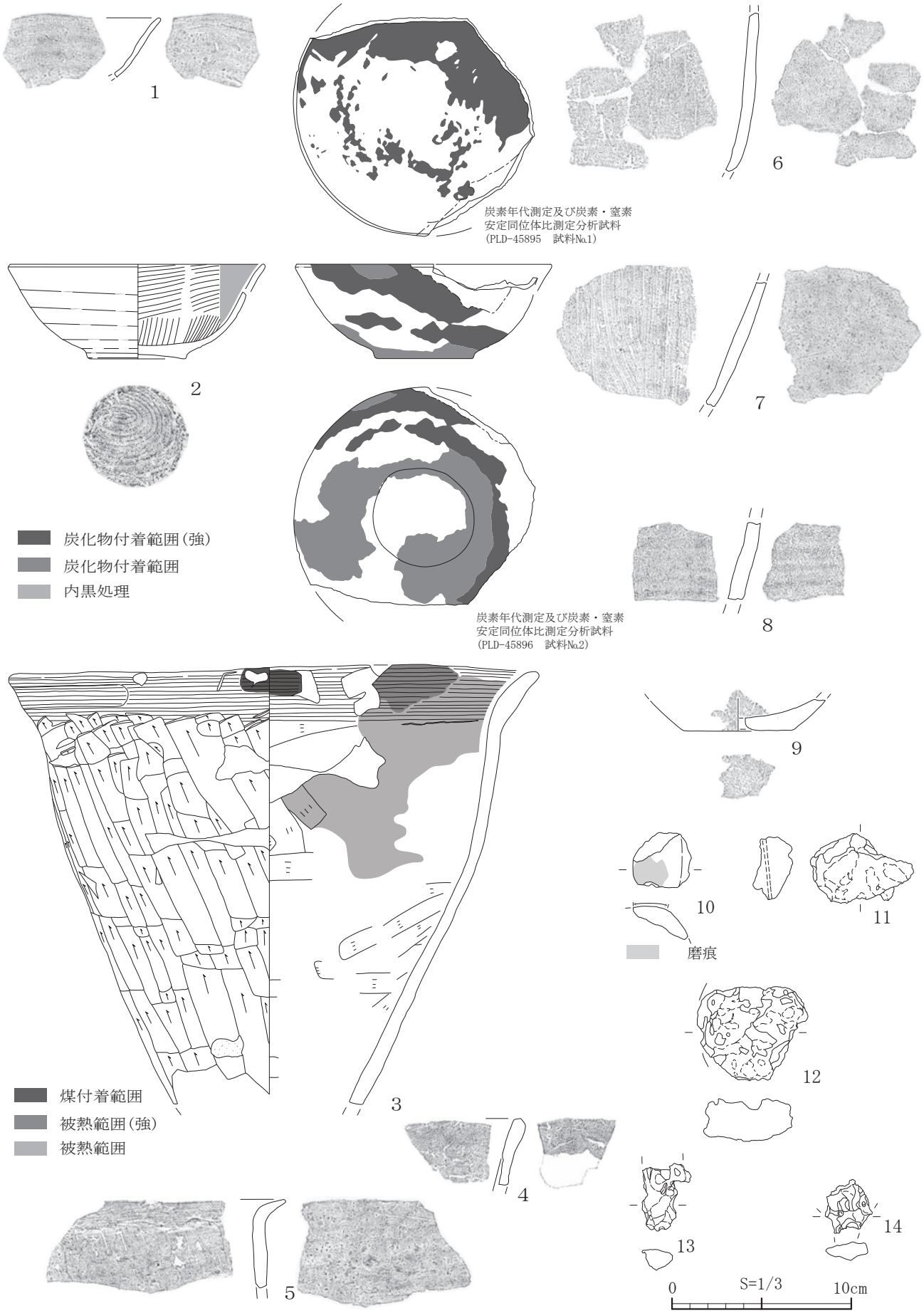


図９　第１号竪穴建物跡(新)(２)

第１号竪穴建物跡（旧）（SI01（古））（図10、写真６・12）

【位置・確認】調査区北東端のP・Q-19・20グリッドに位置する。第Ⅲ層で検出したが、調査区壁面の土層観察から、第Ⅱ層を掘り込んで構築していることが判明した。前述のとおり調査着手時当初は１棟の竪穴建物跡として認識していたが、造り替えられていることが判明し、古期の本建物跡をSI01（旧）とした。

【平面形・規模】建物跡の北側約半分程度が調査区域外にあるが、平面形は一辺４m以上の方形をなすものと推定される。壁長及び確認面から床面までの深さは、南西壁（4.0）m・深さ51cm、南東壁（3.5）m・深さ54cmを測る。いずれの壁も外傾しながら立ち上がる。建物跡の軸方位は、カマドが北東壁にあるとすればN-32°-E、北西壁にあるとすればN-57°-W前後と推定される。

【床面・壁面】第Ⅳ層を床面にし、凹凸が見られる。検出した建物範囲内には貼床や硬化範囲は確認できなかった。壁溝（SD01）は南東壁で確認できた。幅24cm、深さ12～30cmである。

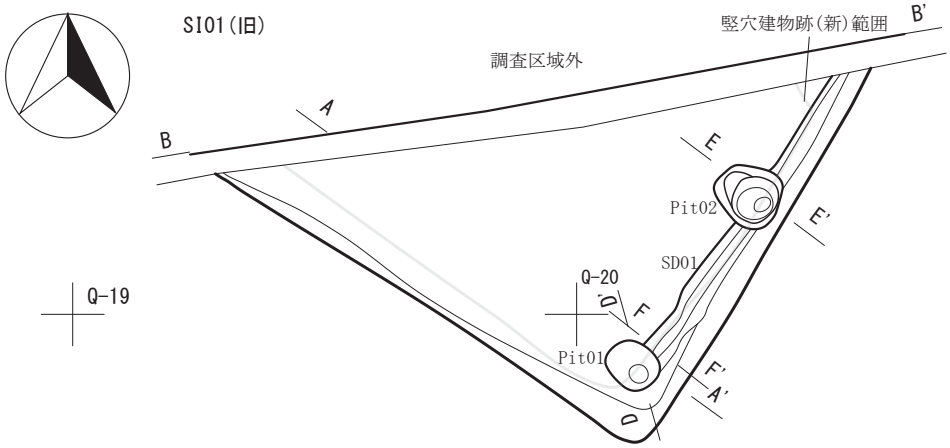
【堆積土】暗褐色土主体で５層に分層した。第１号竪穴建物跡（新）と連続して層序番号を付したため、本建物跡に係る層序番号は第８～11層である。第10層はPit01・第11層は壁溝の堆積土である。ローム粒・ロームブロックの混入度合いが高く、人為的に埋め戻されたものと思われる。第８層に混入するにぶい黄褐色土を火山灰と推測し分析を行ったところ、十和田八戸テフラに由来する可能性が指摘された（第４章第１節参照、火山灰２）。

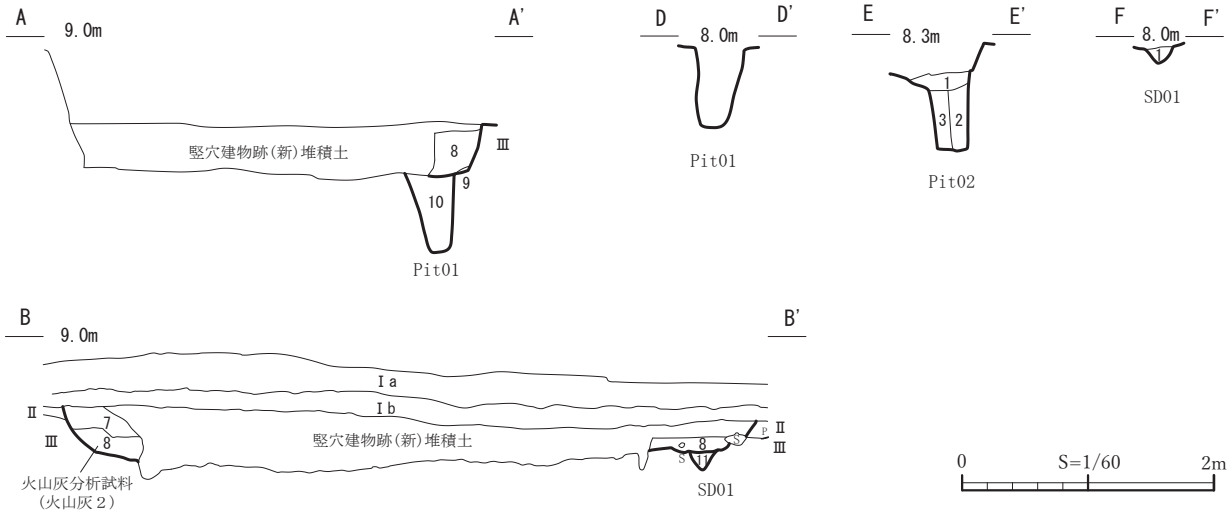
【カマド】検出した建物範囲内には確認できなかった。調査区外に延びる竪穴建物跡北東壁もしくは北西壁に作られているものと推定される。

【柱穴】南隅と南東壁際から２基検出した。主柱穴と考えられる。南隅のPit01は44×37cmの楕円状で、床面からの深さは63cmを測る。堆積土は暗褐色土の単層でしまりがないため、柱は抜き取られたものと推測される。南東壁際のPit02は55×50cmの楕円状で、床面からの深さは63cmを測る。堆積土は３層に分層した。第２層はしまりがなく、柱痕跡と考えられる。第１層は硬くしまっており、柱は切取られたものと推測される。

【出土遺物】土師器が81.1g出土し、うち３点（72.3g）図示した。全て甕である。１は口縁部、２・３は胴部である。いずれも外面はケズリ調整・内面はナデ調整である。１・３は壁溝から出土したもの、２は第８層と第１層が接合したものである。１は器表面に顕著な被熱痕跡が認められる。その他カマドの芯材と思われる被熱礫が４点3,560.6ｇ出土した。石材は、凝灰岩が重量比で99.87％(3,556.1g)、石英0.13％（4.5g）である。

【小結】遺構の形態、遺構の重複関係、出土遺物などから、平安時代の遺構である。堆積土の状況は人為的に埋め戻されたものとみられ、10世紀中葉以降に構築・廃棄された建物跡と考えられる。





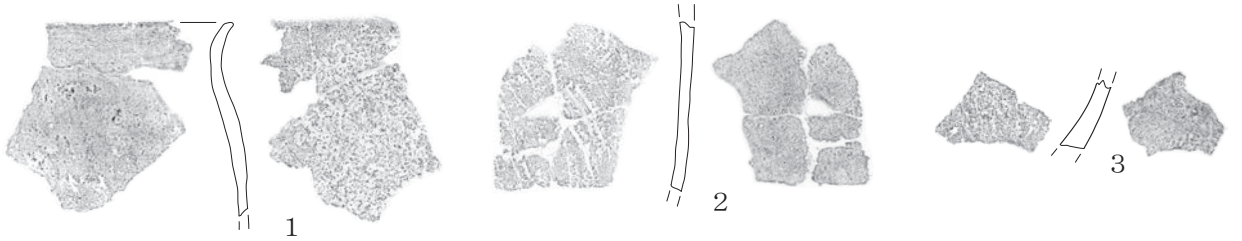
0　S=1/60　2m

SI01(旧)
7層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒(φ1～3mm)3%。
8層　10YR4/4　褐色土　ローム粒(φ3～20mm)20%。10YR4/3にぶい黄褐色土粒(φ3～10mm)5%。
9層　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒(φ10mm)20%。
10層　10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック(φ50mm)40%。Pit01堆積土。
11層　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒(φ1mm)1%。ローム粒(φ1～3mm)5%。SD01堆積土。

SI01(旧) Pit01
1層　10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック(φ30～50mm)30%。しまりなし。柱抜取穴。

SI01(旧) Pit02
1層　10IR3/4　暗褐色土　ロームブロック(φ10～30mm)20%。粘土を含んだ埋土。硬くしまる。柱切取穴。
2層　10YR3/2　黒褐色土　しまりなし。柱痕跡。
3層　10YR5/6　黄褐色土　10YR2/2黒褐色土ブロック5%。非常に硬い。柱掘方。

SI01(旧) SD01
1層　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒(φ1mm)1%。ローム粒(φ1～3mm)5%。



0　S=1/3　10cm

図10　第１号竪穴建物跡(旧)

２　土坑（図11、写真７・12）

土坑は３基検出した。調査区の縁辺に位置し、平面形は楕円形である。遺物の出土は第１号土坑以外はなかったため詳細な時期は不明であるが、検出層位等から平安時代もしくはそれ以降の可能性がある。

第１号土坑（SK01）（図11、写真７・12）

【位置・確認】調査区中央南端のK-16・17グリッドで、第Ⅰ層除去後の第Ⅱ層上面で火山灰の広がりと黒褐～暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】無し。

【規模・平面形・壁面】長軸216cm・短軸166cmの楕円形を呈する。深さは81cmである。壁は底面から内湾して立ち上がり、半円状の断面形状をしている。

【堆積土】黒～暗褐色土主体で８層に分層した。第１層中には白頭山－苫小牧火山灰（第４章第１節参照）の混入が認められる。火山灰は土坑の南側に偏在し、長軸107cm・短軸89cmの円状の範囲で確認されたが、中心部が薄い検出状況であった。土層断面でも第１層の下部に帯状に堆積していることから、火山灰は第２層まで埋没した土坑の窪地に流入したものと考えられる。第１・２層中には炭化物粒が、第５～８層中にはロームブロックが混入しており、第２層以下は人為堆積と推定される。

【出土遺物】第１層中から土師器の甕が61.5g出土し、うち１点（56.0g）を図示した（11-１）。火山灰層の上からの出土である。

【まとめ】白頭山－苫小牧火山灰降下以前に構築・廃絶・埋没していたと推定される。

第２号土坑（SK02）（図11、写真７）

【位置・確認】調査区中央北端のP-13・14で、第Ⅰ層除去後の第Ⅱ層上面で検出した。

【重複】無し。

【規模・平面形・壁面】長軸71cm・短軸53cmの楕円形を呈する。深さは22cmである。壁は底面からやや内湾気味に立ち上がり、箱状の断面形状をしている。

【堆積土】２層に分層した。第１層は黒色土層で堅緻である。第２層は暗褐色土で、橙色粒が混入し、湿性に富む。人為堆積と推定される。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と考える。

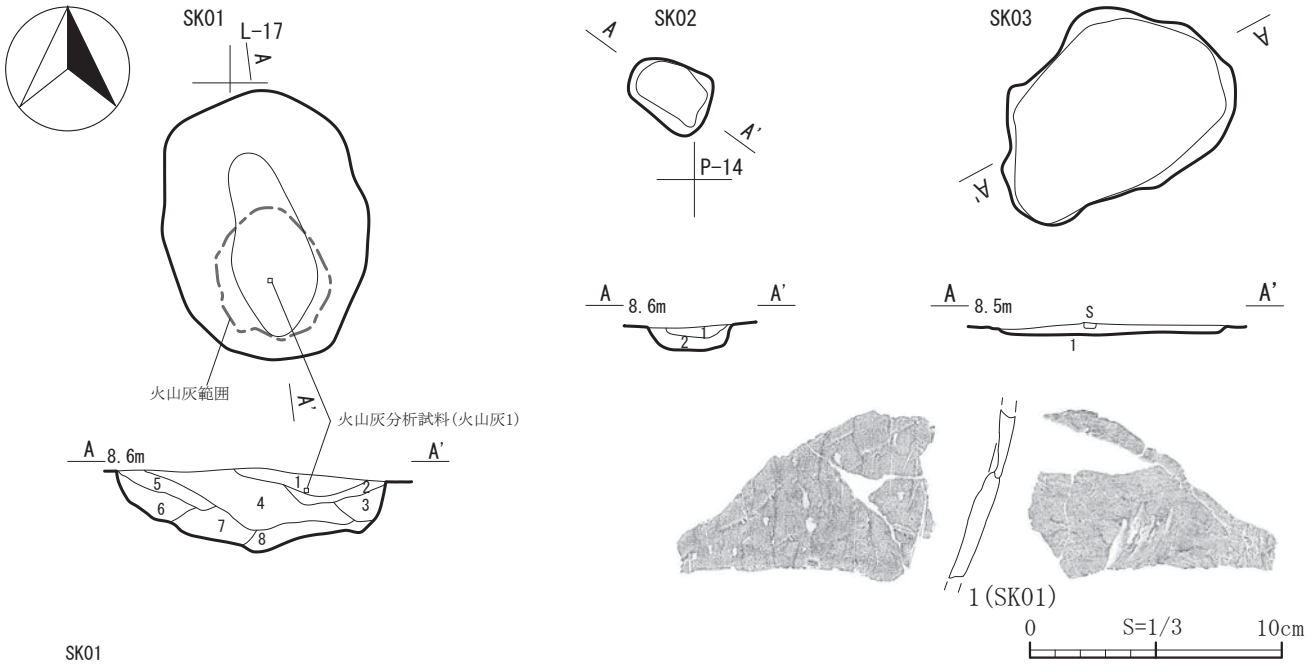
第３号土坑（SK03）（図11、写真７）

【位置・確認】調査区東端の０・P-22グリッドで、第Ⅲ層上面で検出した。

【重複】無し。

【規模・平面形・壁面】長軸206cm・短軸149cmの楕円形を呈する。深さは10cmである。底面はほぼ平坦で、壁は底面から外傾して立ち上がり、皿状の断面形状をしている。

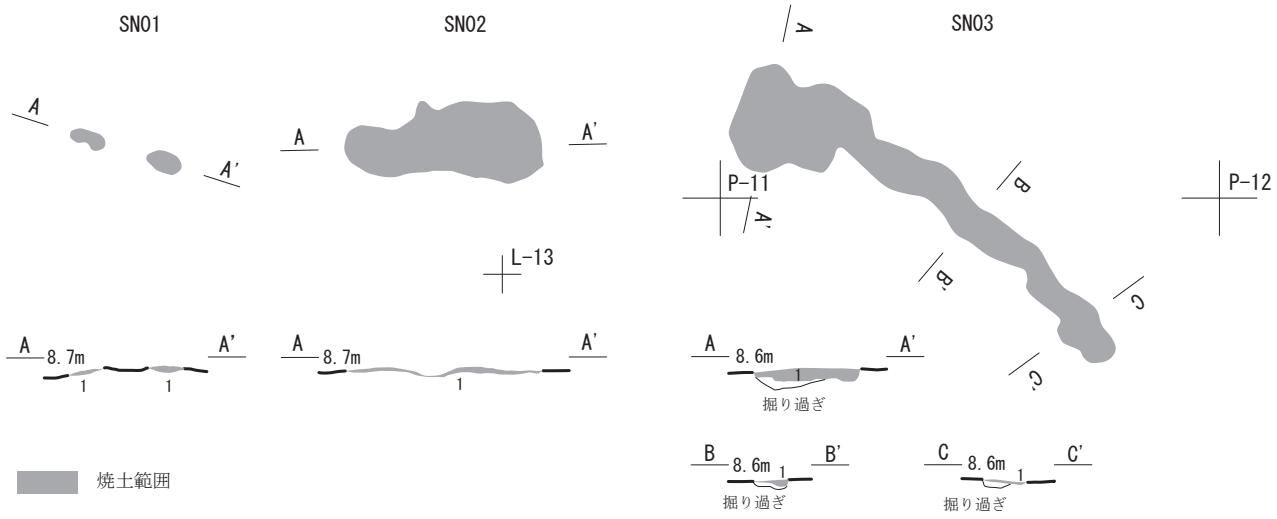
【堆積土】黒褐色土の単層で、炭化物粒・ロームブロックが混入している。また、被熱礫が１点混入していた。人為堆積と推定される。



SK01
1層　10YR3/3　暗褐色土　上層に炭化物粒(φ5～10mm)2%。下層に火山灰ブロック(φ10～50mm)15%。火山灰はレンズ状。しまり中。粘性中。
2層　10YR3/4　暗褐色土　炭化物粒(φ1～5mm)7%。火山灰粒(φ2～10mm)5%。炭化物は土壌化している。しまり中。粘性中。
3層　10YR2/1　黒色土　10YR3/4暗褐色土粒(φ1～5mm)3%。しまり中。粘性中。
4層　10YR3/2　黒褐色土　下層に10YR3/4暗褐色土粒(φ1～10mm)10%。しまり中。粘性中。
5層　10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック(φ10mm)1%。しまり中。粘性中。
6層　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロック(φ10mm)2%。しまり中。粘性中。
7層　10YR2/3　黒褐色土　ロームブロック(φ10～50mm)10%。しまり中。粘性中。
8層　10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック(φ10～20mm)3%。しまり中。粘性中。

SK02
1層　10YR3/1　黒褐色　細砂粒7%。堅緻で乾くとクラックが生じる。粘性あり。
2層　10YR2/3　暗褐色　橙色粒(φ2～3mm)2%。湿性に富む。粘性あり。

SK03
1層　10YR2/2　黒褐色土　炭化物粒(φ1～5mm)1%。ロームブロック(φ5mm)1%。上層に被熱礫混入。しまり中。粘性中。

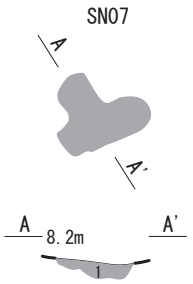


SN01
1層　10YR3/1　黒褐色土　7.5YR6/6橙色粒(φ1～4mm)5%。しまりあり。

SN02
1層　10YR3/1　黒褐色土　7.5YR6/6橙色粒(φ1～3mm)7%。しまりあり。非常に堅緻。

SN03
1層　10YR2/2　黒褐色　橙色粒(φ1～3mm)2～5%。細砂粒7%。炭化物粒(φ1～2mm)2%。粘性あり。

SN07
1層　10YR4/6　褐色土　5YR5/8明赤褐色焼土粒(φ5～10mm)7%。ローム粒(φ5～10mm)5%。炭化物粒(φ1mm)1%。



0 S=1/60 2m

図11　土坑・焼土遺構

【出土遺物】遺物は出土しなかった。
【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と推定される。

３　焼土遺構（図11、写真８・９）

焼土遺構は当初７基検出したが、第４～６号焼土遺構と命名したものは第Ⅱ～Ⅲ層中に下位の第Ⅳ層以下のロームが集積したものであると判断し、欠番とした。それぞれに伴って出土した遺物は無いため詳細な時期は不明であるが、検出層位等から平安時代もしくはそれ以降の可能性がある。

第１号焼土遺構（SN01）（図11、写真８）
【位置・確認】調査区中央のM-12グリッドで、第Ⅰ層除去後の第Ⅱ層上面で検出した。試掘調査で確認されたものである。
【重複】無し。
【規模・平面形】小規模な楕円状の焼土範囲が東西に２つ並ぶ。西側のものは長軸30cm・短軸14cm、東側のものは長軸29cm・短軸17cmで、焼土の厚さは西側が３cm・東側は６cmである。黒褐色主体で、橙色粒が混入する。しまりはあるが、被熱は顕著ではない。
【出土遺物】無し。
【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と考える。

第２号焼土遺構（SN02）（図11、写真９）
【位置・確認】調査区中央のL-12・13グリッドで、第Ⅰ層除去後の第Ⅱ層上面で検出した。
【重複】無し。
【規模・平面形】長軸160cm・短軸65cmの楕円形を呈する。焼土厚は５cmである。黒褐色主体で、橙色粒が混入する。しまりがあり、非常に堅緻であるが、被熱は顕著ではない。
【出土遺物】無し。
【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と考える。

第３号焼土遺構（SN03）（図11、写真９）
【位置・確認】調査区中央北寄りの０・P-11グリッドで、第Ⅰ層除去後の第Ⅱ層上面で検出した。
【重複】無し。
【規模・平面形】径90cmの不整円と幅約37cm・長さ約280cmの溝状に延びる焼土が結合したオタマジャクシに似た平面をしている。長軸368cm・短軸90cmである。焼土厚は北西の不整円で10cm・南東の溝で２cmである。黒色主体で、橙色粒・細粒砂・炭化物粒が混入する。被熱は顕著ではない。
【出土遺物】無し。
【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と考える。

第７号焼土遺構（SN07）（図11、写真９）
【位置・確認】調査区中央南端のJ-13グリッドにおいて、第Ⅲ層上面で検出した。

【重複】無し。
【規模・平面形】長軸78cm・短軸64cmの楕円形を呈する。焼土厚は13cmである。褐色主体で、明赤褐色焼土粒、ローム粒、炭化物粒が混入する。被熱は顕著ではない。
【出土遺物】無し。
【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と推定される。

第３節　遺構外出土遺物

遺物は調査区のほぼ全域から散発的に出土した。調査区北西部から出土したものが多いが、これは昭和51年調査区の埋戻し土に混入していたものである。

１　縄文時代

（１）土器（図12-１～３、写真13）

遺構外からは総数で３点（48.6g）の縄文土器が出土した。極めて少ない。全て図示した。１・２は胎土中に繊維が混入していることから、縄文時代前期と推定されるが、器面の摩耗が激しく土器型式等の比定はできない。１は器面に多軸絡条体と推定される縄文が施されている。３は口唇部にＲＬが施文されるものであるが、小片のため時期不明である。

（２）石器（図12-４～図13-４、写真13）

遺構外からは総数で31点（1,698.5g）の石器が出土した。剥片石器が30点（1,690.5g）、礫石器１点（8.0g）である。石材は、珪質頁岩が重量比で98.50%を占め（29点・1,673.0g）、緑色凝灰岩1.50%（２点・25.5g）となっている。器種は、石鏃（重量比0.14%：１点・2.4g）、石匙（0.79%：１点・13.5g）、スクレイパー（4.65%：２点・78.9g）、二次加工のある剥片（0.52%：１点・8.9g）、微細剥離のある剥片（8.93%：５点・151.6g）、石核（65.68%：３点・1,115.6g）、剥片（18.82%：17点・319.6g）、磨製石斧（0.47%：１点・8.0g）が出土している。特定の石材・器種に偏る傾向が認められる。

以下、器種ごとに述べる。

石鏃（図12-４、写真13）

有茎平基のものが１点（2.4g）出土した。両側縁がやや直線的な二等辺三角形状のものである。

石匙（図12-５、写真13）

縦形のものが１点（13.5g）出土した。表面の器面調整は正面中央に及び、裏面の調整は摘み部に集中する。厚さは９㎜、断面形は半円状である。

スクレイパー（図12-６・７、写真13）

２点（78.9g）出土した。素材剥片の縁辺に連続する刃部加工が施されたものである。刃部加工はともに２側縁に施され、加工は急角度で施されている。６は剥離方向が片面であるが、正面右側縁・

裏面左側縁は交互に刃部加工が施されている。７も剥離方向が片面であるが、正面左側縁・裏面右側縁は一部両面加工である。石材は６が珪質頁岩、７が緑色凝灰岩である。

二次加工のある剥片（図12-８、写真13）

１点（8.9g）出土した。表皮が残る剥片を素材とし、正面の側縁下端に片面から刃部調整とは異なる粗い加工がなされたものである。

微細剥離のある剥片（図12-９～13、写真13）

５点（151.6g）出土し、全てを図示した。素材剥片の縁辺に微細な剥離痕が認められるもので、剥離痕は素材剥片の１側縁から２側縁にみられる。剥離方向は全て片面である。９～11は２側縁に微細剥離が認められるものである。９は正面・裏面の左側縁に微細剥離が認められる。10・11は両側縁に部分的に認められる。12・13は１側縁に微細剥離が認められるものである。これも側縁の一部に部分的に認められる。９～11・13は表皮が残る素材を利用している。

石核（図13-１～３、写真13）

３点（1,115.6g）出土した。素材となる礫や剥片の打面を転移しながら剥片を作出している。１は今回確認されたもので最も大きなもので、８点が接合したものである。正面に長さ約８cm、幅９cmの剥片をとった痕跡が認められる。２は２点が接合したものである。上面の礫面を打面として剥片作出を行い、下面や側面からも剥離が試みられるものの、上面ほどの大きな剥離はみられない。３は１・２より小振りなもので、表面では上面の端部、裏面では上面の中央から剥片を作り出している。

剥片

17点（319.6g）出土したが図示しなかった。石材は珪質頁岩である。

磨製石斧（図13-４、写真13）

１点（8.0ｇ）出土した。刃部片で、表裏面を研磨している。石材は緑色凝灰岩である。

２　平安時代

平安時代の遺物は、土師器・須恵器・擦文土器・土製支脚・砥石・鉄滓が出土した。

（１）土師器（図14-１～８、写真14）

土師器は539.9ｇ出土し、うち８点（259.0ｇ）を図示した。全て甕である。１・２は口縁部、３～５は胴部、６～８は底部である。調整は、外面がケズリ･内面はナデで、底部はナデ調整のもの（６・７）とケズリ調整のもの（８）とがある。全体に被熱し、１・８は特に顕著である。１は製塩土器の可能性がある。小片であるため詳細な時期は不明であるが、後述する須恵器の存在から勘案し、10世紀中葉以降と推測される。

（２）須恵器（図14-９、写真14）

須恵器は１点（20.4ｇ）出土した。甕の胴部片で、外面はタタキ、内面にはナデが見られる。五所川原産と推測され、10世紀中葉の時期が推定される。

（３）擦文土器（図14-10～14、写真14）

擦文土器は５点（47.0ｇ）出土し、全てを図示した。全て甕で、外面にハケメ、内面にミガキが施されたものである。10・11は口縁部、12～14は胴部である。口縁部は外面と口唇部に沈線が施されたもので、11の外面には小口状の工具によると思われる刺突が矢羽状に施されている。12・13は貼付囲繞帯が施された胴部片で、貼付囲繞帯の上面には馬蹄形文が施されたものである。14は沈線が施された胴部であるが、文様モチーフは不明である。（平山）

（４）土製支脚（図14-15～28、写真14）

土製支脚は547.4ｇ出土し、うち14点（264.1ｇ）を図示した。全て棒状に作られた土製支脚で内孔を有し、１点を除く13点は体部片である。15～24・26～28は体部片。15～19の外形は多角柱状で、四角柱の四隅を面取りした八角柱を呈するものと思われ、特に18・19及び15・16・17には規格性が認められる。内孔形は全て円形で、芯材は15を除き、焼成前に抜かれていたものと思われる。20～23の外形も多角柱状であるが、規格性はそれほど認められない。内孔形は円形を呈する。24の体部は多角柱状と思われるが、残存部表面は成形時に凹状にやや抉られている状況が確認できた。内孔形は円形を呈する。26～28の外形は円柱状で、残存部外形はかなり摩耗している。内孔形は円形で、孔径が他個体に比べ、やや大きくなる傾向が認められる。芯材は26以外、焼成前に抜かれていたものと思われる。25は支・脚部片。平面形は多角形で、体部外形も多角柱状を呈していたものと思われる。内孔形は円形で、芯材は焼成前に抜かれていたものと思われる。孔径が他個体に比べ、やや大きい。色調は、破損面も含め淡橙～灰白色を呈している。（笹森）

（５）砥石（図14-29～31、写真14）

３点（31.8ｇ）出土し、全て図示した。29は幅５㎜程の薄い板状の石の端部を使用面としたもの、30・31は礫面の１～２面を使用面としたもので、30は使用面の境界に稜ができている。石質は、29が珪質頁岩、30・31が凝灰岩である。

（６）鉄滓（図14-32、写真14）

１点（45.1ｇ）出土した（32）。表面は灰白色を呈し、上面は比較的平坦で、下面は半球状を呈する。内面は全体に密で重みがある。炉内滓と推定される。

その他被熱礫が26点680.7ｇ出土した。２～３㎝程の小塊である。カマドの芯材もしくは製塩ないし鉄生産関連遺構に関連する可能性がある。石材は、凝灰岩が重量比で32.13％（218.7g）、石英34.52％（235.0g）、珪質頁岩33.35％（227.0g）である。

３　近世

近世の遺物は、陶器・磁器・銭貨が出土した。

（１）陶磁器（図14-33・34、写真14）

33は磁器の碗である。口縁部片で、内面の文様は波と思われるが小片のためはっきりしない。肥前Ⅳ～Ⅴ期（1690～1860年代）の年代が推定される。34は陶器碗の腰部と思われる。灰釉で、近世の瀬戸・美濃の小碗と推定されるが、小片のため詳細な時期等は不明である。

（２）銭貨（図14-35、写真14）

35は寛永通寶一文銭の銅貨で、寛永通寶２期の通称新寛永（文銭）である。寛文８年（1668）以降の年代が考えられる。（平山）

図12　遺構外出土遺物（１）

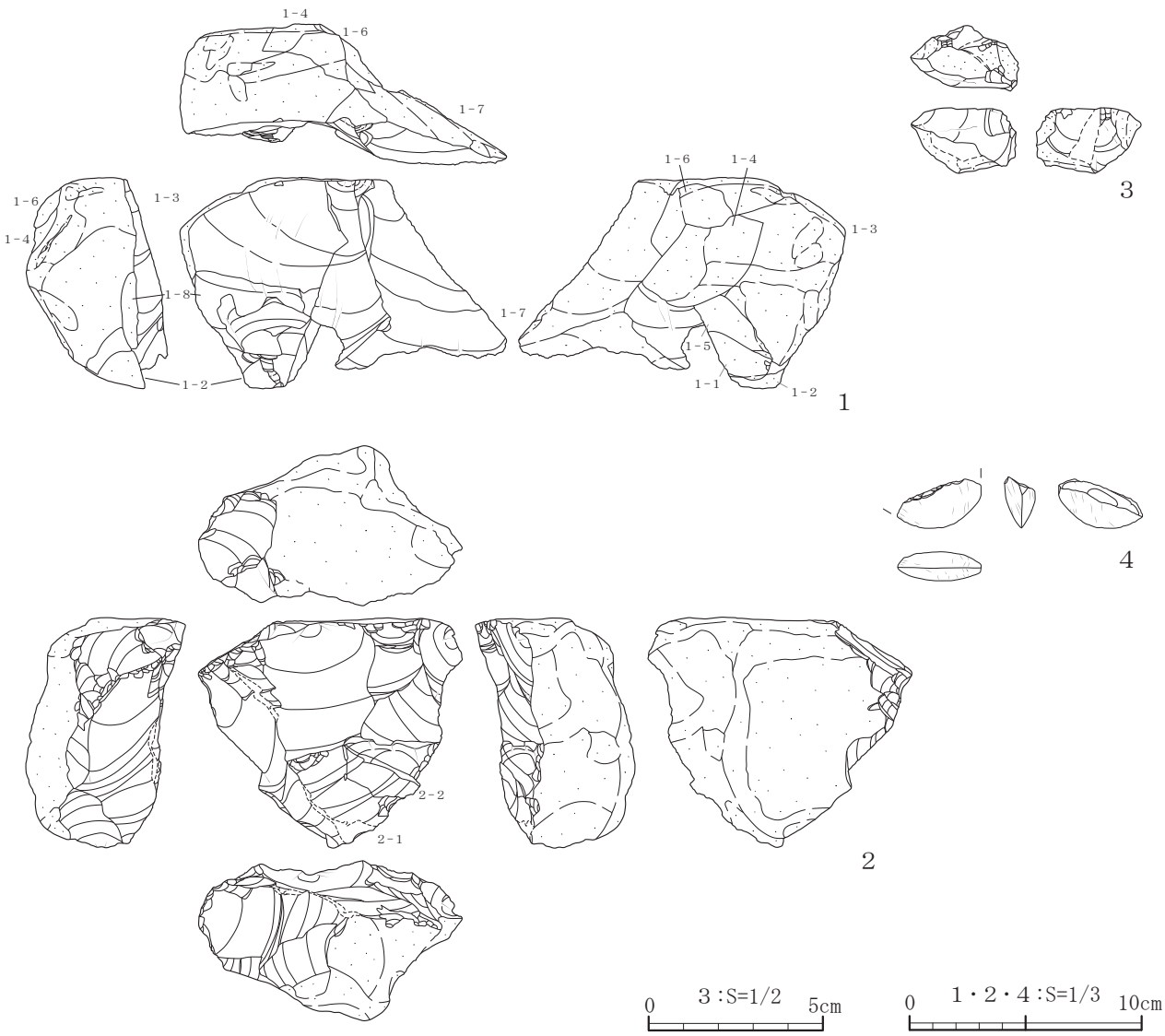


図13　遺構外出土遺物（２）

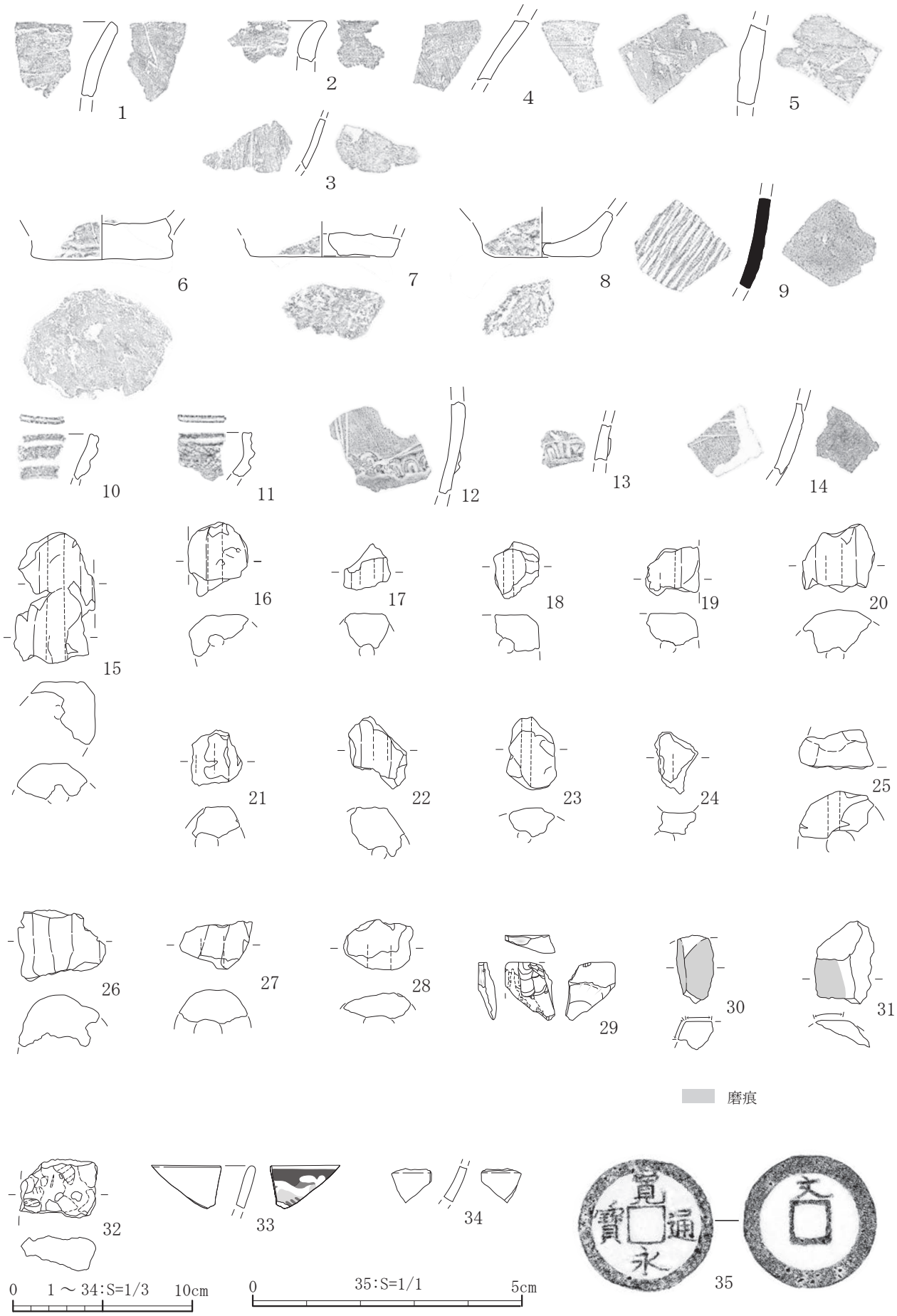


図14　遺構外出土遺物（３）

第４章　自然科学分析

第１節　上野平遺跡出土の火山灰について

弘前大学大学院・理工学研究科　佐々木　実

試料

分析を行った試料は、表１に示す２試料である。

分析方法および分析結果

上記２試料の火山灰について、以下の分析を行った。

提供された試料は、約10ｇを分取し、超音波洗浄機を用いて繰り返し水洗を行い含まれる粘土鉱物等の粒径数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、乾燥した。得られた粒子の実体顕微鏡による観察、および粒径250㎛のふるいを通過した試料を紫外線硬化樹脂により封止したスミアスライドの偏光顕微鏡による観察を行った。火山ガラスおよび火山灰起源鉱物の有無を確認し、その形態、構成鉱物の種類を記載した。

分析結果を表２に示す。またスミアスライドの偏光顕微鏡写真を図１に示す。

火山灰の帰属

火山灰１は、平安時代もしくはそれ以降と推定される土坑の堆積土上位に堆積した火山灰であり、白頭山－苫小牧テフラと予想されている。

白頭山－苫小牧テフラ（B-Tm）は、中華人民共和国および朝鮮民主主義人民共和国の国境に位置する白頭山（長白山）の10世紀の噴火によって生じたテフラであり、軽石型およびバブル型の無色火山ガラス、アルカリ長石およびエジリンオージャイトを含む（町田・新井，2003）。本テフラの噴出年代は、AD946年の冬とされている（早川・小山，1998；Oppenheimer et al.，2017:Hakozaki et al.，2018）。

表２に示すように、火山灰１は主としてバブル型の無色火山ガラス（粒径50㎛程度）からなり、アルカリ長石およびエジリンオージャイトを含むことにより、白頭山－苫小牧テフラに帰属される。有色鉱物として微量の直方輝石・普通輝石および普通角閃石粒子が認められるが、これらは粒径100㎛前後と火山ガラス粒子よりも粗粒であり、２次的に混入したものと推定される。

火山灰２は、竪穴建物跡の壁から採取されていることから、遺跡の年代より古い時代の堆積物に由来すると考えられる。斜長石・普通角閃石・直方輝石および普通輝石を含み、軽石型火山ガラスを主とする特徴からは、十和田八戸テフラに由来する可能性がある。ただし、火山ガラスの量が少ないことから、本試料が初生的な降下火山灰層からのものであるか、堆積後に２次的に移動したものであるかを判別することは、観察結果のみからは困難である。

十和田八戸テフラは、十和田カルデラのカルデラ形成期の最後の噴出物であり、降下火山灰と火砕流堆積物からなる。軽石型およびバブル型の無色火山ガラス、斜長石、直方輝石、普通輝石、およ

び普通角閃石を含む（町田・新井，2003）。本テフラの噴出年代は、Horiuchi et al.(2007) により、15.5cal ka BP とされている。

引用文献

Hakozaki, M., Miyake, F., Nakamura, T., Kimura, K., Masuda, K., & Okuno, M. (2018) Verification of the Annual Dating of the 10th Century Baitoushan Volcano Eruption Based on an AD 774-775 Radiocarbon Spike. *Radiocarbon*, **60**, 261-268.

早川由紀夫・小山真人（1998）日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日―十和田湖と白頭山― . 火山，**43**，403-407.

Horiuchi, K., Sonoda, S., Matsuzaki, H. and Ohyama, M. (2007) Radiocarbon analysis of tree rings from a 15.5- cal kyr BP pyroclastically buried forest: a pilot study. *Radiocarbon*, 49, 1123-1132.

町田　洋・新井房夫 (2003)，新編火山灰アトラス　－日本列島とその周辺－ . 東京大学出版会，336p.

Oppenheimer, C., L. Wacker, J. Xu, J.D. Galván, M. Stoffel, S. Guillet, C. Corona, M. Sigl, N. Di Cosmo, I. Hajdas, B. Pan, R. Breuker, L. Schneider, J. Esper, J. Fei, J.O.S. Hammond, U. Büntgen (2017) Multi-proxy dating the 'Millennium eruption' of changbaishan to late 946 CE. *Quat. Sci. Rev.*, **158**, 164-171.

表1　上野平遺跡　火山灰サンプル

サンプル番号	出土位置	層位	分析に使用した重量(g)	洗浄後重量(g)
火山灰1	SK01	1層	11.2	1.2
火山灰2	SI01(B-B')	8層	42.0	1.3

表2　上野平遺跡　火山灰記載

サンプル番号	火山ガラス			鉱物								帰属
	bw	pm	br	pl	af	qz	opx	aug	ag-aug	ho	opq	
火山灰1	○	○	－	＋	○	－	＋	＋	＋	○	＋	B-Tm
火山灰2	＋	○	＋	○	－	＋	○	○	－	○	＋	To-H?

○:含まれる;　＋:微量に含まれる;　－:含まれない
bw: バブル型ガラス, pm: 軽石型ガラス, br: 褐色ガラス, pl: 斜長石, at: アルカリ長石, qz: 石英,
opx: 直方輝石, aug: 普通輝石, ag-aug: エジリンオージャイト, ho: 普通角閃石, opq: 不透明鉱物
B-Tm: 白頭山苫小牧テフラ, To-H: 十和田八戸テフラ

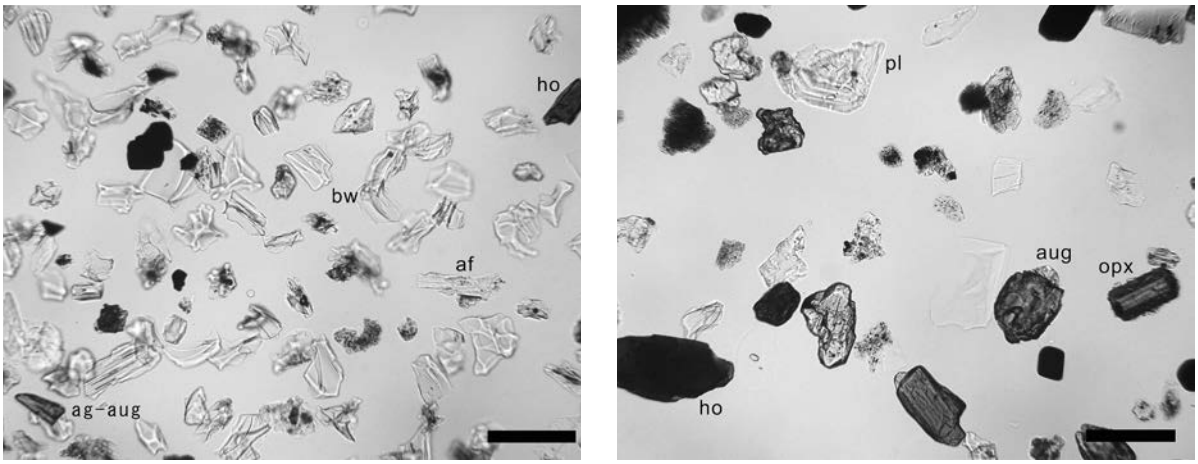


図１　火山灰試料の偏光顕微鏡写真。下方ポーラのみ（オープンニコル）。
　左：火山灰１、右：火山灰２。右下スケールの長さは200㎛。記号は表２に同じ。

第２節　放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体比測定

株式会社　パレオ・ラボ

１．はじめに

上野平遺跡より出土した土器に付着する炭化物を採取し、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。同時に、海洋リザーバー効果の影響や、炭化物の起源物質を推定するために、炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また、炭素含有量と窒素含有量を測定して試料のC/N比を求めた。

２．試料と方法

試料は、土器１点（P-1）の内面と外面に付着した炭化物２点（試料No.1、2）である。土器はSI01竪穴建物跡から出土した坏で、平安時代の土器と考えられている。

放射性炭素年代測定の試料の情報、調製データは表１のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による推定時期	前処理データ	前処理
PLD-45895	遺構：SI01 竪穴建物跡 試料No.1 遺物No.P-1	種類：土器付着物 器種：坏 部位：口縁部～底部内面 状態：dry	平安時代	前処理前重量：103.62mg 燃焼量：4.61mg 精製炭素量：1.30mg 炭素回収量：0.56mg	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L）
PLD-45896	遺構：SI01 竪穴建物跡 試料No.2 遺物No.P-1	種類：土器付着物 器種：坏 部位：胴部外面 状態：dry	平安時代	前処理前重量：72.67mg 燃焼量：2.44mg 精製炭素量：1.19mg 炭素回収量：0.45mg	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L）

炭素・窒素安定同位体比測定は、超音波洗浄、アセトン洗浄および酸・アルカリ・酸洗浄の前処理後の試料を､EA（ガス化前処理装置）であるFlash EA1112（Thermo Fisher Scientific社製）を用いて、炭素含有量および窒素含有量の測定を行った。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。炭素安定同位体比（$\delta^{13}C_{PDB}$）および窒素安定同位体比（$\delta^{15}N_{Air}$）の測定には、質量分析計DELTA V（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比にはIAEA Sucrose（ANU）、窒素安定同位体比にはIAEA N1を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させた。次に、還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムでCO_2とN_2を分離、そのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。EAで得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比（モル比）を算出した。

３．結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦

年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、暦年較正結果を、表３に^{13}C/^{12}C比を、表４に炭素安定同位体比と窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N比を示す。また、図１に暦年較正結果、図２に炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係、図３に炭素安定同位体比とC/N比の関係を示した。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	測定回数	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-45895 試料No.1 遺物No.P-1	9	-23.53±0.23	1540±19	1540±20	482-491 cal AD (7.01%) 537-573 cal AD (61.26%)	437-463 cal AD (9.95%) 476-499 cal AD (12.89%) 510-515 cal AD (0.93%) 531-593 cal AD (71.68%)
PLD-45896 試料No.2 遺物No.P-1	9	-26.07±0.18	1587±19	1585±20	434-467 cal AD (29.67%) 473-482 cal AD (7.42%) 490-518 cal AD (23.73%) 528-537 cal AD (7.45%)	427-542 cal AD (95.45%)

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表３　各測定での^{13}C/^{12}C比(%)

測定番号	PLD-45895	PLD-45896
1	1.0963	1.0946
2	1.0961	1.0938
3	1.0961	1.0939
4	1.0967	1.0936
5	1.0971	1.0936
6	1.0973	1.0941
7	1.0977	1.0939
8	1.0975	1.0942
9	1.0972	1.0946

表４　炭素・窒素安定同位体比測定結果

試料番号	試料情報	δ^{13}C$_{PDB}$ (‰)	δ^{15}N$_{Air}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
PLD-45895 試料No.1 遺物No.P-1	種類：土器付着物 備考：内面	-23.3	8.0	53.7	0.83	75.2
PLD-45896 試料No.2 遺物No.P-1	種類：土器付着物 備考：外面	-23.2	6.3	55.3	0.36	178.1

４．考察

試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。以下、各試料の暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲（確率95.45%）に着目して、結果を整理する。

SI01竪穴建物跡から出土した坏（P-1）の内面付着炭化物（試料No.1：PLD-45895）は、437-463 cal AD（9.95%）、476-499 cal AD（12.89%）、510-515 cal AD（0.93%）、531-593 cal AD（71.68%）の暦年代であった。外面付着炭化物（試料No.2：PLD-45896）は、427-542 cal AD（95.45%）の暦年代であった。

炭素・窒素安定同位体比分析では、試料No.1（PLD-45895）のδ^{13}Cは-23.3‰、δ^{15}Nは8.0‰、試料No.2（PLD-45896）のδ^{13}Cは-23.2‰、δ^{15}Nは6.3‰であった。図２で試料No.1（PLD-45895）はC_3植物と海棲哺乳類の間でC_3植物に近い位置にプロットされ、試料No.2（PLD-45896）は草食動物とC_3植物の重なる位置にプロットされた。試料No.1、2とも窒素含有量が少なく、C/N比が非常に高かったため、いずれも図３にはプロットされなかった。今回得られた年代は推定時期よりも200年以上古く、海産物の影響も受けていないと考えられた。坏が埋没する過程で、火災などにより古い植物由来の炭化物が付着した可能性などが考えられる。

（AMS年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・山本　華）

参考文献

赤澤　威・南川雅男（1989）炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元．田中　琢・佐原　眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」：132-143，クバプロ．

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S.（2020）The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41（cited 12 August 2020）

坂本　稔（2007）安定同位体比に基づく土器付着物の分析．国立歴史民俗博物館研究報告，137，305-315.

米田　穣（2008）丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析．豊田市郷土資料館編「丸根遺跡・丸根

城跡」：261-263，豊田市教育委員会.

Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002) Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44(2), 549-557.

吉田邦夫・宮崎ゆみ子（2007）煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究．平成 16-18 年度科学研究補助金基礎研究 B（課題番号 16300290）研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」，85-95.

吉田邦夫･西田泰民（2009）考古科学が探る火炎土器．新潟県立歴史博物館編「火焔土器の国　新潟」：87-99，新潟日報事業社.

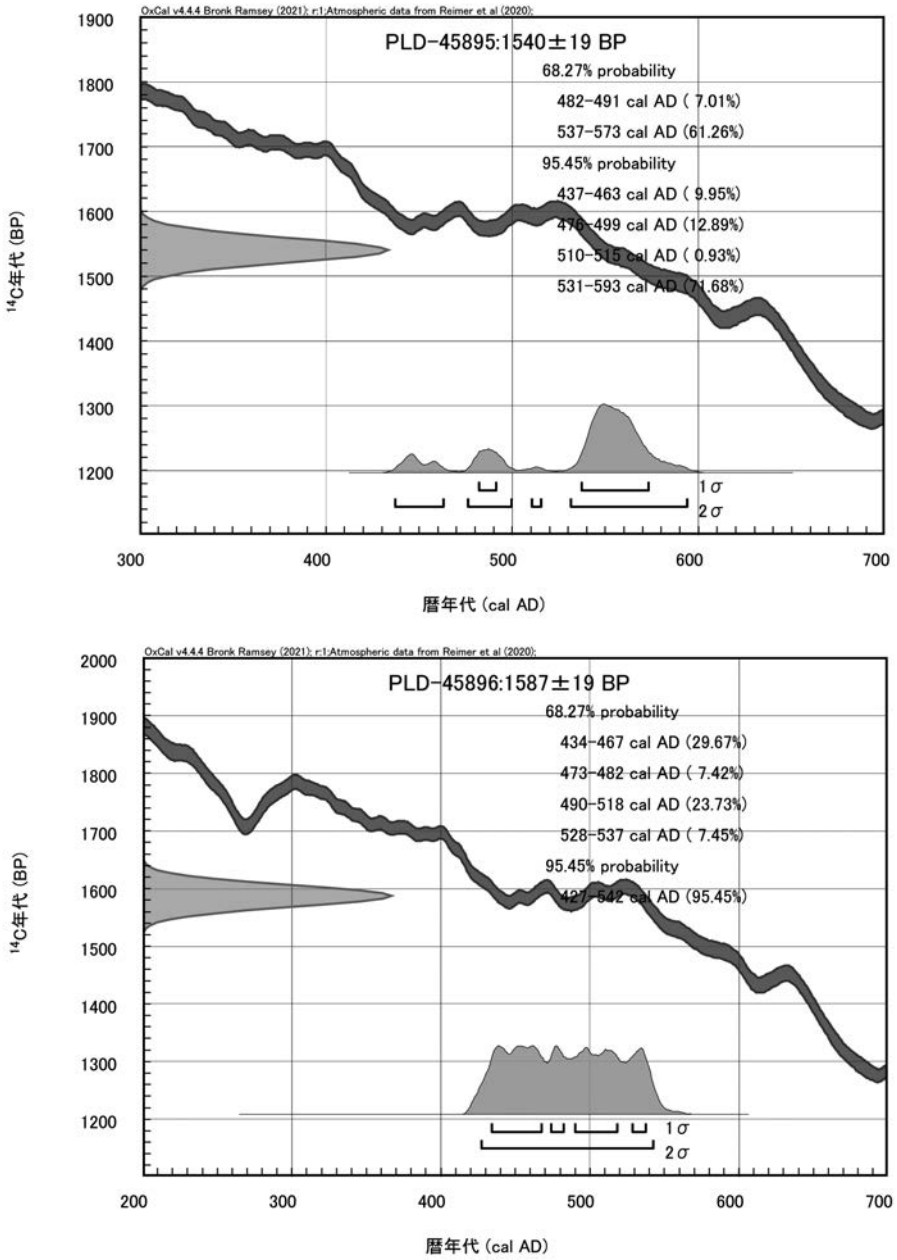


図１　暦年較正結果

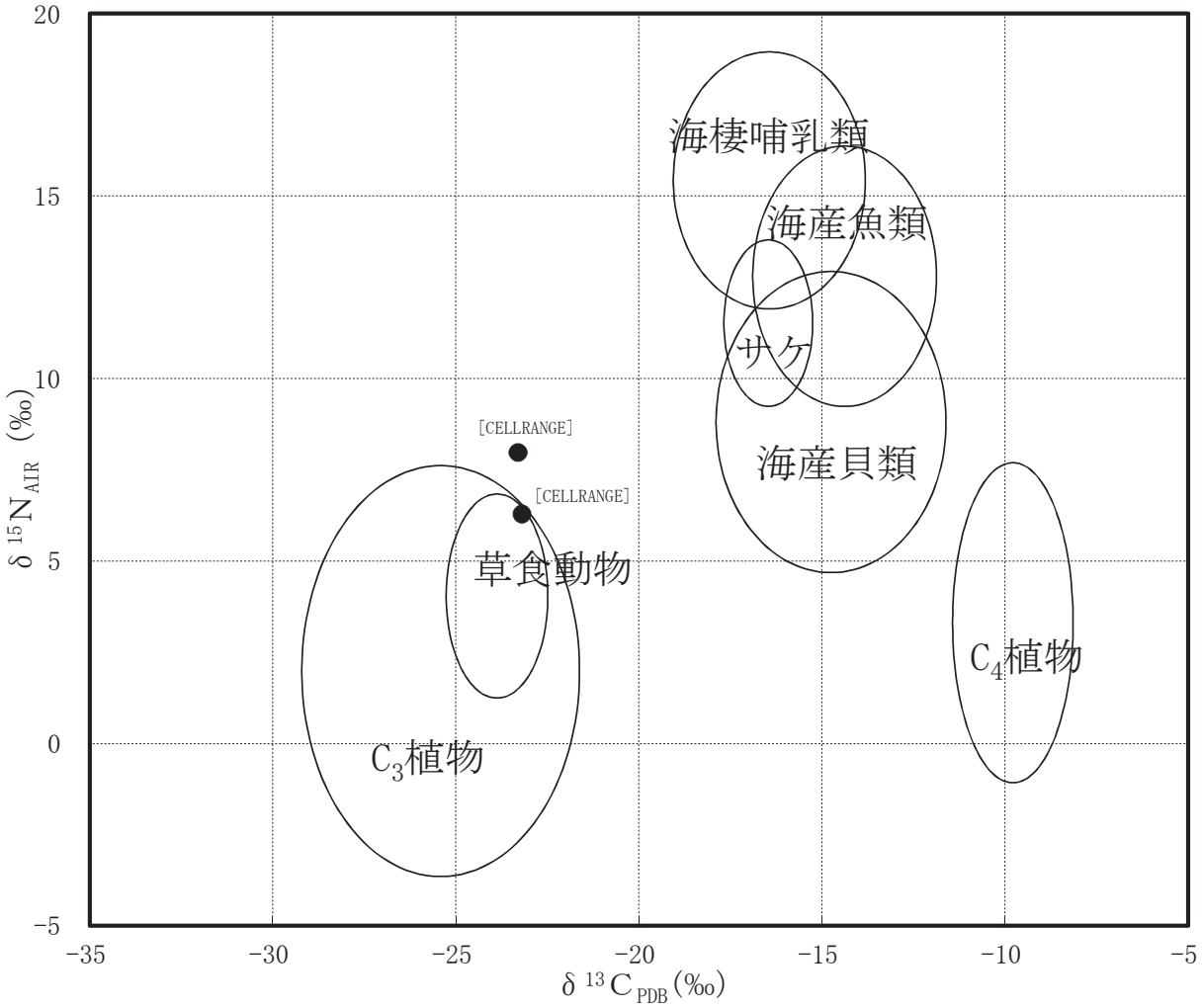


図２　炭素・窒素安定同位体比（吉田・西田(2009)に基づいて作製）

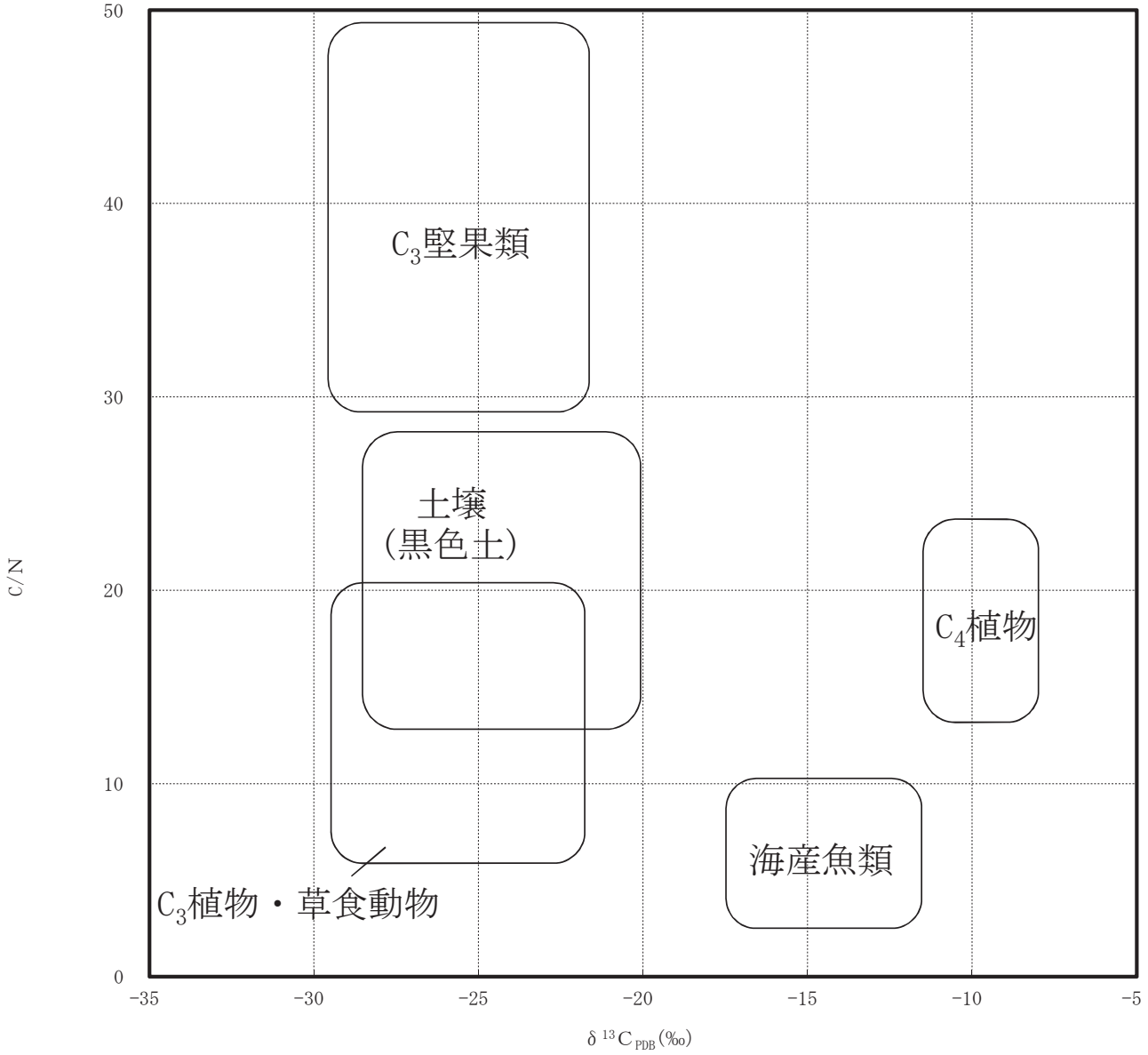
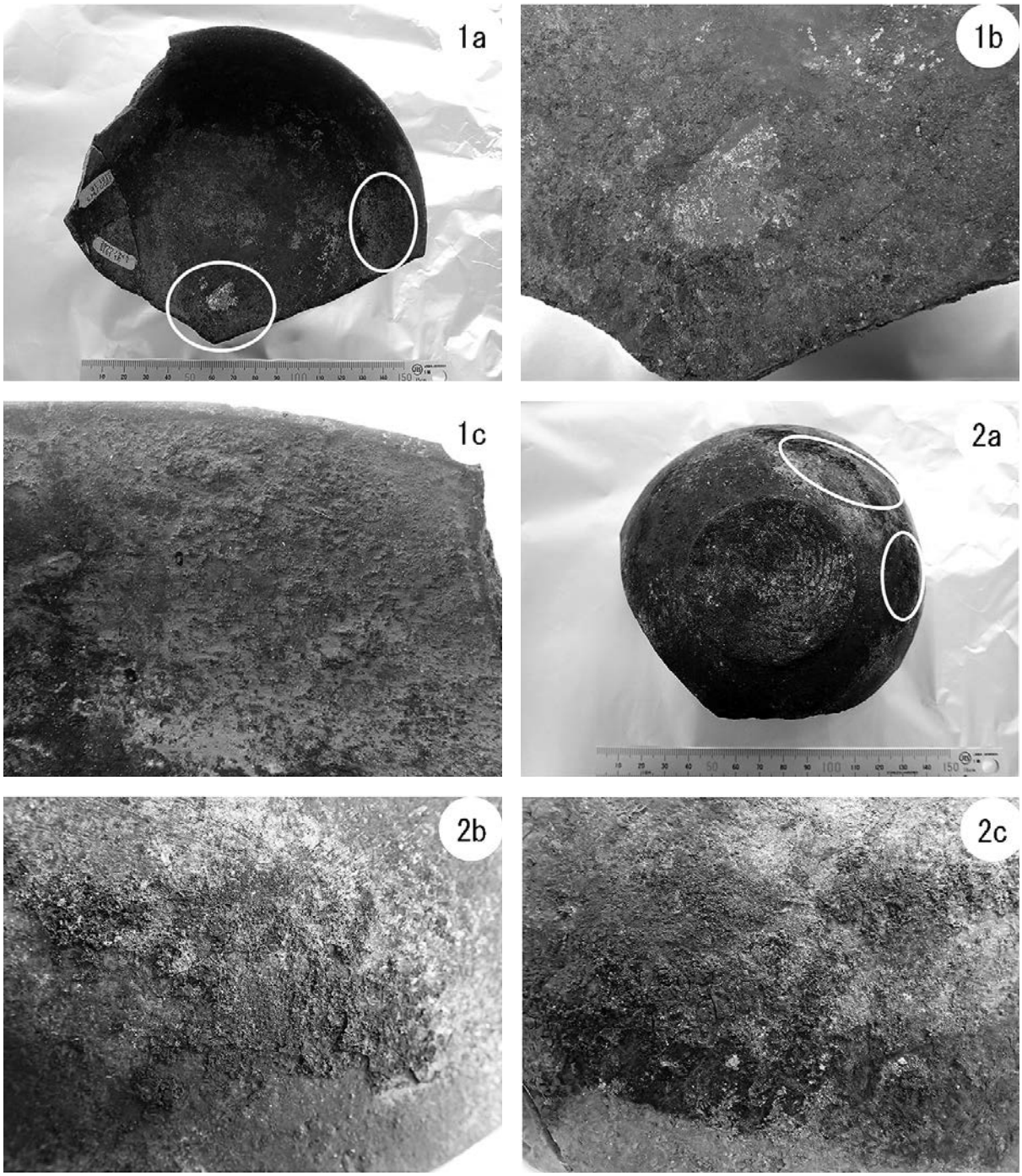


図３　炭素安定同位体比と C/N 比の関係（吉田・西田(2009)に基づいて作製）



図版１　土器付着炭化物の試料写真

１．No.１（P-1 内面）、２．No.２（P-1 外面）

a：全体写真、b・c：試料採取箇所拡大写真、○：採取箇所

第５章　総括

第１節　縄文時代の上野平遺跡について

今回の調査では縄文時代の遺構は検出しなかった。縄文土器は、遺構外から総数で３点（48.6g）出土した。うち２点は胎土中に繊維が混入していることから、縄文時代前期と推定されるが、器面の摩耗が激しく土器型式等の比定はできない。残りの１点は口唇部にＲＬが施文されるものであるが、小片のため時期不明である。縄文時代の石器は、遺構外から総数で31点（1,698.5g）出土した。散漫的な出土で、特定箇所に集中するような出土はなかった。剥片石器が30点（1,690.5g）、礫石器１点（8.0g）である。石材は､珪質頁岩が重量比で98.50％を占め（29点･1,673.0g)､緑色凝灰岩1.50％（２点・25.5g）となっている。剥片石器の器種・石材組成について、表２にまとめた。

表２　石器組成表

表２－１（全体）

器種＼石材		点数合計 重量合計	構成比	珪質頁岩	構成比	緑色凝灰岩	構成比
石鏃	点数	1	3.23%	1	3.23%		
	重量	2.4	0.14%	2.4	0.14%		
石匙	点数	1	3.23%	1	3.23%		
	重量	13.5	0.79%	13.5	0.79%		
石核	点数	3	9.68%	3	9.68%		
	重量	1115.6	65.68%	1115.6	65.68%		
スクレイパー	点数	2	6.45%	1	3.23%	1	3.23%
	重量	78.9	4.65%	61.4	3.61%	17.5	1.03%
二次加工のある剥片	点数	1	3.23%	1	3.23%		
	重量	8.9	0.52%	8.9	0.52%		
微細剥離のある剥片	点数	5	16.13%	5	16.13%		
	重量	151.6	8.93%	151.6	8.93%		
剥片	点数	17	54.84%	17	54.84%		
	重量	319.6	18.82%	319.6	18.82%		
磨製石斧	点数	1	3.23%			1	3.23%
	重量	8.0	0.47%			8.0	0.47%
総計	点数	31	100.00%	29	93.55%	2	6.45%
	重量	1698.5	100.00%	1673.0	98.50%	25.5	1.50%

表２−２（剥片石器組成表）

器種＼石材		点数合計 重量合計	構成比	珪質頁岩	構成比	緑色凝灰岩	構成比
石鏃	点数 重量	1 2.4	3.33% 0.14%	1 2.4	3.33% 0.14%		
石匙	点数 重量	1 13.5	3.33% 0.80%	1 13.5	3.33% 0.80%		
石核	点数 重量	3 1115.6	10.00% 65.99%	3 1115.6	10.00% 65.99%		
スクレイパー	点数 重量	2 78.9	6.67% 4.67%	1 61.4	3.33% 3.63%	1 17.5	3.33% 1.04%
二次加工のある剥片	点数 重量	1 8.9	3.33% 0.53%	1 8.9	3.33% 0.53%		
微細剥離のある剥片	点数 重量	5 151.6	16.67% 8.97%	5 151.6	16.67% 8.97%		
剥片	点数 重量	17 319.6	56.67% 18.91%	17 319.6	56.67% 18.91%		
合計	点数 重量	30 1690.5	100.00% 100.00%	29 1673.0	96.67% 98.96%	1 17.5	3.33% 1.04%

表２−３（礫石器組成表）

器種＼石材		点数合計 重量合計	構成比	緑色凝灰岩	構成比
磨製石斧	点数 重量	1 8.0	100.00% 100.00%	1 8.0	100.00% 100.00%
合計	点数 重量	1 8.0	100.00% 100.00%	1 8.0	100.00% 100.00%

石器は出土点数が少ないものの、石核と剥片の出土比率が高いこと、定形石器と同じ石材の石核が出土することから、遺跡内で石器製作が行われていたことが推測される。定形石器や二次加工のある剥片は小型のものが多いことから、小型の剥片石器を製作していた可能性が高い。石材はほぼ珪質頁岩に限られる。珪質頁岩はこの地域に分布する小沢層に由来するものと考えられ、遺跡直下の海岸には多量に散布していることから、容易に獲得できたと推定される。

過去調査でも縄文時代の遺構は検出されず、遺物の出土も僅かであった（橘・奈良1977）。しかしながら、遺跡周辺で縄文時代の遺物が採取されている（寺田1976）。また、今回の調査期間中にも遺跡周辺の住民から調査区の北側にある畑から縄文時代の遺物が出土したことを聞き、出土した石匙や磨製石斧を実見した。このことから、当遺跡の縄文時代の主体となる活動域は、今回の調査区の北側に広がっているものと考えられる。

第２節　平安時代の上野平遺跡について

１　遺構について

（１）竪穴建物跡

調査区北東から１棟検出した。建物跡の北側約半分程度が調査区域外にあるため、建物跡全体の輪郭は不明である。本建物跡は造り替えられていることが判明し、新期をSI01（新）、古期の建物跡をSI01（旧）とした。検出した範囲では、SI01（新）の規模はSI01（旧）より小さく、SI01（旧）の中に入子状に構築されている。カマドは検出した建物範囲内では確認できなかった。調査区外に延びる竪穴建物跡北東壁もしくは北西壁に作られているものと推定される。上北北部・陸奥湾沿岸では10世紀以降に東カマドが主流になるとされる（宇部ほか2014）ことを勘案すると、北西壁よりも北東壁に作られていた可能性が高いが、下北地域での様相は後述のとおり調査事例が少ないため、今後の事例増加後に再度検討を要する。SI01（旧）の床面が平坦で、掘削工具痕と推定される凹凸が見られなかったため、調査時点ではSI01（新）の掘方SI01（旧）の直上までと判断していたが、図面等の検討からSI01（新）の掘方はSI01（旧）の床面を掘り込んでいる可能性がある。主柱穴と考えられる柱穴はSI01（新）では１基、SI01（旧）では２基検出した。SI01（旧）の柱穴は壁際に寄ったいわゆる「壁柱タイプ」で、６本柱の建物跡であった可能性がある。柱穴規模はSI01（新）に比べSI01（旧）の方が大きく、また、堆積状況から、SI01（新）のPit01とSI01（旧）のPit01は柱の抜き取り、SI01（旧）のPit02は柱の切取り行為があったと推測される。SI01（新）の床面から焼土・炭化物が多量に出土しており、焼失建物跡と判断される。遺物はSI01（新）から土師器の坏・甕、石器（砥石）、鉄生産関連遺物（鉄製品・鉄滓・羽口溶解物）が、SI01（旧）から土師器の甕が出土した。SI01（新）では主に床面から出土した。坏の９－２は内外面に炭化物が付着している。甕は外面がケズリ・内面はナデが卓越するものがほとんどで、器表面に顕著な被熱痕跡が認められるものもある。甕の９－３は底部に向かって急激にすぼまる器形である。その他、被熱礫や焼成粘土が出土した。これらがカマドの芯材や構築材であった場合、建物跡の廃棄の際にカマドが壊された可能性がある。堆積土中に白頭山－苫小牧火山灰が確認できなかったことから、10世紀中葉以降の構築年代が推定され、後述する遺物の年代から11世紀前葉に廃絶した建物跡と考えられる。

下北地域におけるで平安時代の竪穴建物跡は､むつ市川内町田野沢（１）遺跡･むつ市最花遺跡（旧最花南遺跡）・むつ市第一田名部小学校校庭遺跡・むつ市内田（１）遺跡・東通村銅屋（３）遺跡・東通村アイヌ野遺跡・東通村将木館遺跡・東通村向野（２）遺跡・東通村稲崎遺跡で調査事例があり、本遺跡で10遺跡目になると思われる。時期が分かる建物跡の多くは10世紀前半とされ、本遺跡と同時期のものは将木館遺跡が該当しそうであるが、数が少なく各建物跡の比較ができる状況にない。現時点では下北地域の最西で確認された平安時代の建物跡と指摘するに留め、資料の増加を待ちたい。

（２）土坑

３基検出した。調査区の縁辺に位置し、平面形は楕円形である。第１号は第１層中に白頭山－苫小牧火山灰が窪地に自然堆積しており、火山灰降下年代である10世紀中葉以前に構築・廃絶・埋没していたと推定される。SI01（新）期には白頭山－苫小牧火山灰が確認できなかったことから、少なくとも第１号土坑はSI01（新）より古い位置付けが可能である。後述する出土遺物とも整合しており、調

査区周辺域に集落がある可能性が考慮される。第１号土坑以外は遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明であるが、検出層位等から平安時代もしくはそれ以降の可能性がある。用途や性格は不明である。

（３）焼土遺構

４基検出した。調査区中央と南北端に位置し、平面形は不整形である。被熱範囲は黒褐色に橙色粒が混入する程度で、しまりはあるが、被熱は顕著ではない。時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と考える。被熱の厚さが使用時間に比例するものと仮定すると、その期間は短かったものと推定される。北海道では、屋外炉の灰の片付けや生活残滓の廃棄行為の痕跡とされる「焼土粒集中」が擦文時代に伴って検出されており、そのような遺構である可能性もある。

２　遺物について

平安時代の出土遺物を図15・16にまとめた。

（１）土師器（図15－１～20）

竪穴建物跡（SI01（新））からの出土が大半を占める。遺構外からは散漫的な出土状況を示し、特定箇所に集中するような出土はなかった。

遺構内外から土師器の坏・甕が3,058.3g出土した。坏は２点出土した。いずれも竪穴建物跡（SI01（新））から出土したものである。ロクロ形成で、内面黒色処理がされているもの（１）とされないもの（２）とがある。２の口径は11.2㎝と推定される。底部は欠損しているものの、断面の屈曲具合から底部に近いものと推定される。器高は低く、器壁も薄い。小振りのものである。１は床面から正立状態で出土したもので、内外面に炭化物が付着している。炭化物は、内面には斑状・外面には帯状に付着する。付着炭化物について、放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体を行ったところ（第４章第２節参照、土器内面：PLD-45895・試料№.１/土器外面：PLD-45896・試料№.２）、５世紀前葉～６世紀末葉の年代と、C_3植物に近いもしく草食動物とC_3植物との分析結果が得られた。SI01（新）は焼失建物跡であり、焼失した建物跡の建築部材が土器表面に付着した可能性がある。出土した坏は２点ではあるものの、大型のものと小振りなものと２極化しており、10世紀後半以降の年代が考えられる。３～20は甕である。全体に被熱しており、６・７・19は特に顕著である。器面調整は、外面はケズリ・内面はナデが卓越する。３は底面以外ほぼ復元できた。底部に向かって急激にすぼまる器形である。平川市（旧碇ヶ関村）古館遺跡や北海道松前町札前遺跡から類似した器形の甕が出土している。口縁部の内外面に煤の付着が、内面に被熱痕跡が認められる。４～８は口縁部で、頸部は短く、強く外反する。９～16は胴部で、14はロクロ形成のものである。17～20は底部で、底面はナデ調整のもの（17・18）とケズリ調整のもの（19・20）とがある。底部は張り出さない。６・７・10は製塩土器の可能性がある。以上のように、土師器甕の頸部や器面調整の特徴および遺構の構築年代から10世紀中葉～後葉以降と考えられ、古館遺跡や札前遺跡の年代から11世紀前葉まで下ることも考えられる。

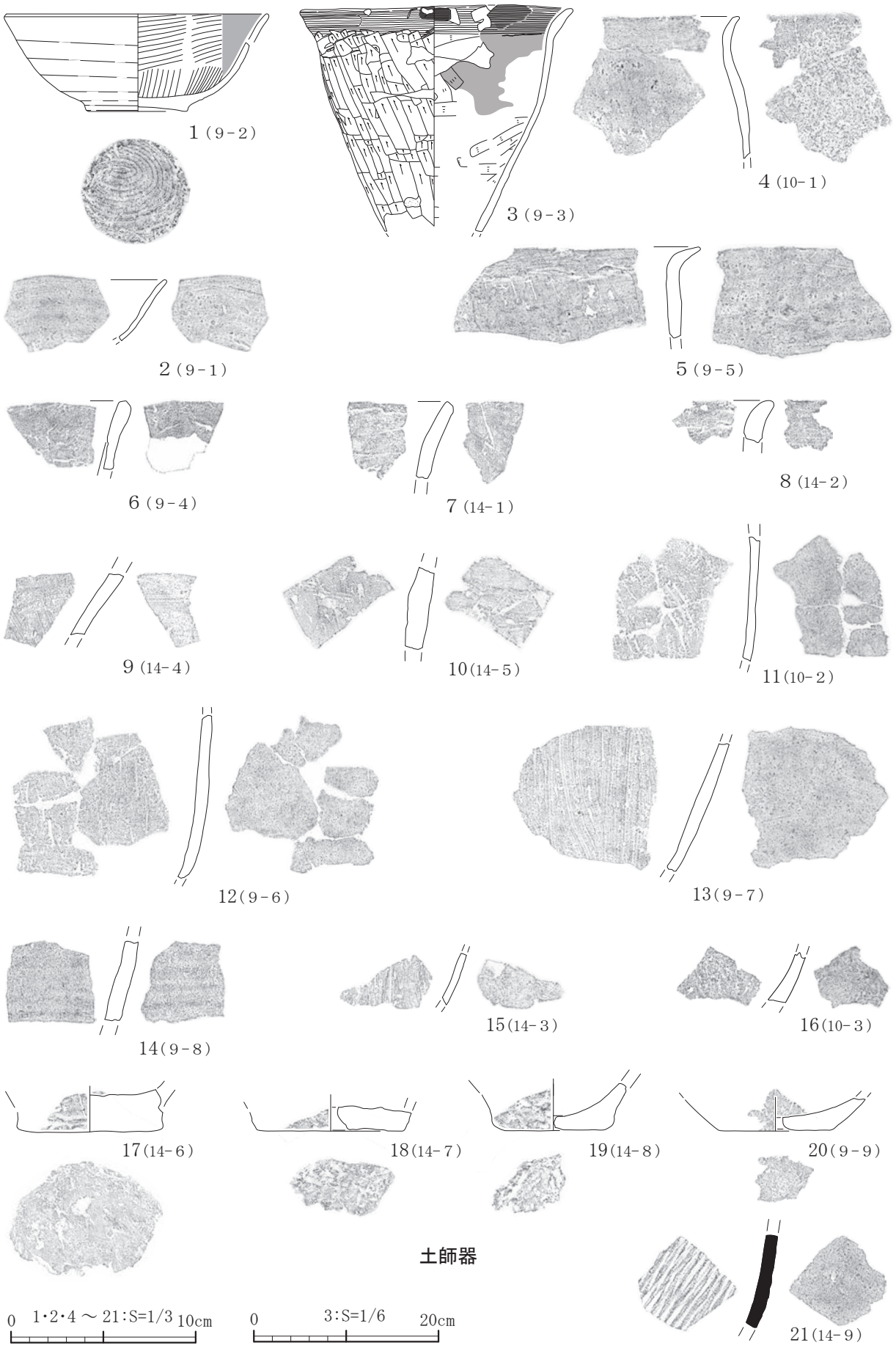


図15　上野平遺跡出土遺物集成図（1）

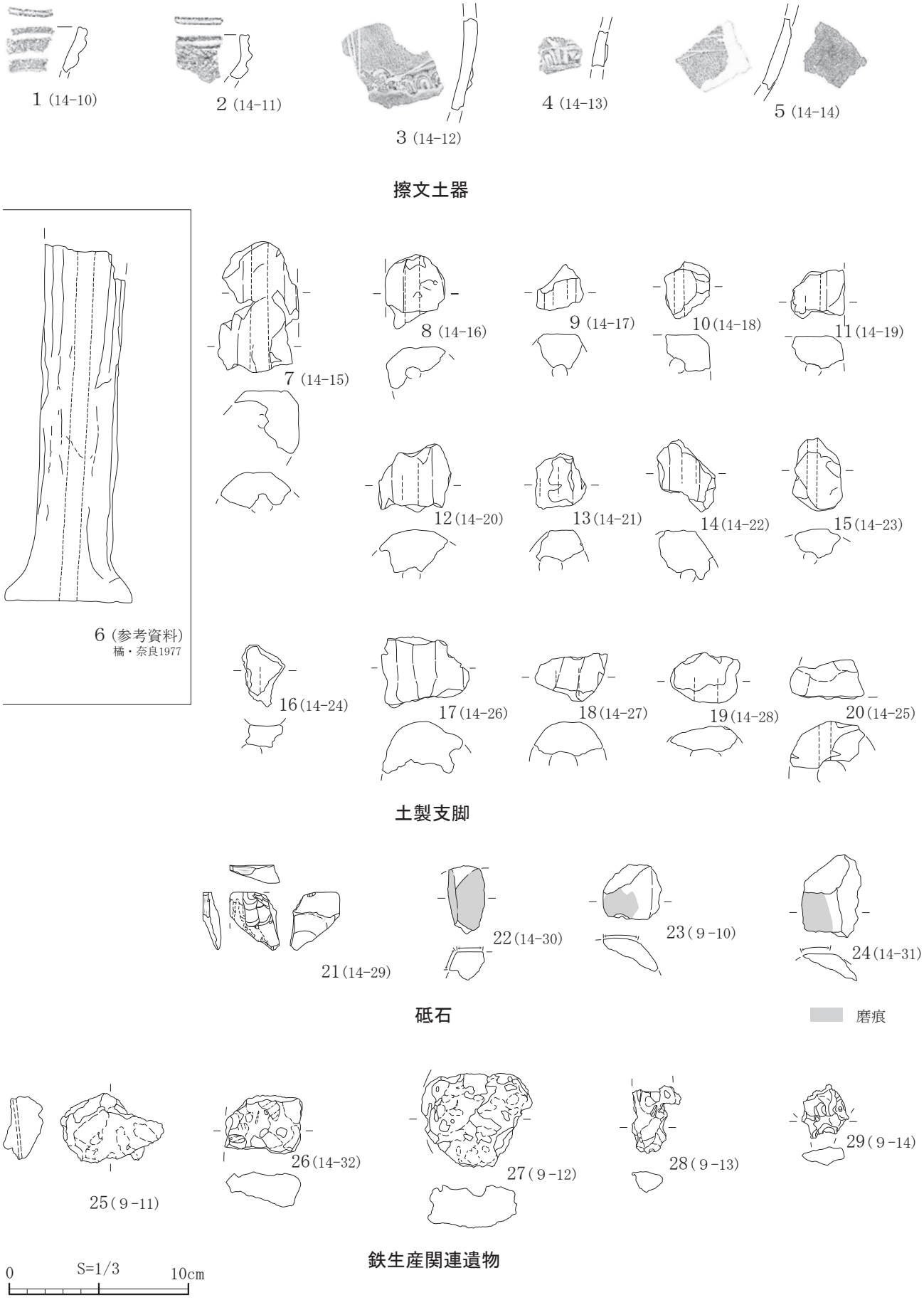


図16　上野平遺跡出土遺物集成図（２）

（２）須恵器（図15－21）

須恵器は遺構外から１点（20.４ｇ）出土した。甕の胴部片で、外面はタタキ、内面にはナデが見られる。諸特徴から五所川原窯跡産と推測され、10世紀中葉以降の時期が推定される。

（３）擦文土器（図16 －１～５）

擦文土器は遺構外から５点（47.０ｇ）出土した。全て甕で、外面にハケメ、内面にミガキが施されたものである。１・２は口縁部、３～５は胴部である。口縁部は外面と口唇部に沈線が施されたもので、２の外面には小口状の工具によると思われる刺突が矢羽状に施されている。３・４は貼付囲繞帯が施された胴部片で、貼付囲繞帯の上面には馬蹄形文が施されたものである。５は沈線が施された胴部であるが、文様モチーフは不明である。前回調査で１と同様のものは第３類擦文土器に分類されている（橘・奈良1977）。これは齋藤のⅠ群土器（齋藤2002）・塚本のＳ２期もしくはＳ４期（塚本2002）・鈴木のⅡ-Ａ類もしくはⅡ-Ｂ類（鈴木2006）に相当すると考えられる。９世紀後葉から10世紀中葉の時期が想定されている。２と同様のものは第２類擦文土器に分類され、同じく齋藤のⅡ群土器・塚本のＳ８期～Ｓ９期 ・鈴木のⅡ－Ｄ類に相当する。10世紀前葉から後葉の時期が仮定されている。３・４と同様のものは第１類擦文土器に分類され、齋藤のⅢ群土器・塚本のＳ９期に相当する。10世紀中葉から11世紀前葉の年代が考えられているが、貼付囲繞帯が施されていることから11世紀（鈴木2006）の年代と考えたい。５は横走沈線がないことから齋藤のⅢ群もしくはⅣ群土器と推定される。（平山）

（４）土製支脚（図16 －７～20）

土製支脚は遺構外から547.４ｇ出土した。全て内孔を有する棒状のもので、多角柱状のものと円柱状のものとがある。図示した14点（264.１ｇ）のうち１点を除く13点は体部片である。色調は、破損面も含め淡橙～灰白色を呈している。７～19は体部片である。７～16の外形は多角柱状で、四角柱の四隅を面取りした八角柱を呈するものと思われる。内孔形は全て円形で、芯材は７を除き、焼成前に抜かれていたものと思われる。17～19の外形は円柱状で、残存部外形はかなり摩耗している。内孔形は円形で、孔径が他個体に比べ、やや大きくなる傾向が認められる。芯材は17以外、焼成前に抜かれていたものと思われる。20は支・脚部片である。平面形は多角形で、体部外形も多角柱状を呈していたものと思われる。内孔形は円形で、芯材は焼成前に抜かれていたものと思われる。孔径が他個体に比べ、やや大きい。多角柱状のものでは規格性が窺われる（特に７・８・９および10・11）。今回の調査では多角柱状のものと円柱状のものとが出土したことになるが、出土状況から時期差や同時性は判明しなかった。なお、前回の調査では多角柱状のものが出土している（橘・奈良1977）。参考資料として、残存率が高いものを提示した（６）。10角柱と報告されているものである。平内町大沢遺跡でも多角柱状のものと円柱状のものとが出土しており、10世紀後半から11世紀後葉の年代が考えられている（青森県教育委員会2005）。

今回の調査では製塩遺構は確認できなかった。製塩土器も出土しなかったが、前述のように土師器の甕としたものの一部に製塩土器が混在している可能性がある。昭和51年の調査では製塩遺構が検出されており、これは標高約９ｍと遺跡の中でも高所に設置されている。陸奥湾からの距離は然程では

ないものの、海面から比高のあるところに直接多量の海水を運び込むのは困難であることから、遺跡近辺の長浜海岸辺りで採鹹工程が行われ、遺跡内で煎熬を行っていたものと推測される。なお、遺跡の所在する宿野部は近世に塩釜が築かれたことが文献記録に残っている（川内町2005）。　　（笹森）

（５）石器（図16－21～24）

石器は砥石が４点（48.7ｇ）出土した。第１号竪穴建物跡（新）の堆積土から１点（23：16.9ｇ）、遺構外から３点（21・22・24：31.8ｇ）の出土である。礫面の１～２面を使用面としたものである。全て破損した小片であるが、使用によるものであるかは判然としない。石材は、21が珪質頁岩で、他は凝灰岩である。21は薄い板状の石の端部を使用面としたものである。なお、前回の調査でもデイサイト（石英安山岩）製の砥石が２点出土している（橘・奈良1977）。

（６）鉄生産関連遺物（図16－25～29）

鉄生産関連遺物は５点（179.8ｇ）出土した。第１号竪穴建物跡（新）の堆積土から４点（25・27～29：134.7ｇ）、遺構外から１点（26：45.1ｇ）の出土である。25は板状の鉄製品・26～28は鉄滓、29は羽口溶解物と思われる。26の表面は灰白色を呈し、上面は比較的平坦で、下面は半球状を呈する。内面は全体に密で重みがある。炉内滓と推定される。27の表面は赤褐色を呈し、上面は比較的平坦で、下面は半球状を呈する。内面は全体に密で重みがある。碗形滓である。28の表面は赤褐色と灰白色が混在し、上面は比較的平坦で、断面は半円状を呈する。炉内流動滓と思われる。製鉄から鍛冶までの過程を示す鉄滓が出土しており、調査区周辺域に鉄生産関連遺構が存在するものと推測する。調査区付近では羽口が採取されている（橘・奈良1977）。

３　平安時代の様相について（図17）

上野平遺跡は、昭和51年の調査で平安時代の製塩遺構が検出され、土師器・擦文土器・土製支脚・鉄製品等が出土している。今回の調査では竪穴建物跡・土坑を検出し、昭和51年の調査区の一部を確認した。遺物は土師器・須恵器・擦文土器・土製支脚・鉄製品等が出土した。

上記のとおり、今回の調査区における土地利用変遷は、10世紀中葉以前と10世紀中葉から11世紀前葉の２期になると推定され、後者が主体と考えられる。竪穴建物跡は調査区北東端で検出したことから、居住域は遺跡東端の宿野部川に面した丘陵崖付近に展開していた可能性が高い。製塩遺構は、確認された昭和51年調査の調査区配置から、今回調査区の北西側に位置していたことが判明した。居住域と空間を分けていた可能性がある。また、製塩遺構は周辺より高まった場所に位置していることから、採鹹過程は海岸付近で行われていたと推測される。煎熬工程のみでなく、製塩土器・土製支脚の製作等の労力を考えると、自家消費よりも交易を目的としていたと推定される。鉄生産関連遺構は検出できなかったが、製鉄から鍛冶までの過程を示す鉄滓が出土していること、調査区付近で羽口が採取されていることから、調査区周辺域に鉄生産関連遺構が存在するものと推測される。おそらく調査区外の北側であろう。出土遺物は９世紀後葉から10世紀中葉と10世紀中葉から11世紀前葉の年代が考えられ、主体は後者であった。土師器・石器・鉄生産関連遺物は竪穴建物跡内から出土したものが多い。土製支脚は調査区北西から出土したものが多く、製塩遺構との関連が窺われる。擦文土器も同様

の出土を示し、昭和51年の調査でも製塩遺構付近から出土している。

当遺跡は陸奥湾沿岸に位置する平安時代の集落遺跡で、降下火山灰や出土遺物から、その存続期間は10世紀中葉以前から11世紀にかけてであると推測される。また、生産活動（製塩・鉄生産）を行っていた集落で、活動域の中心は今回の調査区北側の段丘中央寄りであったと考えられる。製塩や鉄生産は多量の燃料を必要とすることから、集落の機能時には周辺の木々はほとんどが伐採されと推定され、現状では山林となっている遺跡近辺の景色も当時はかなり違っていた可能性が高い。平安時代でも10世紀中葉以前と10世紀中葉から11世紀前葉と考えられる遺構・遺物があるため、大きく２時期が想定される。前者は第１号土坑と擦文土器の一部、後者は第１号竪穴建物跡と土師器・擦文土器の一部・土製支脚である。下北半島は各時代を通して北海道との関係を保つ地域であり、本遺跡も擦文土器の出土から北海道と関連を持っていたと考えられる。本遺跡の主体となる10世紀中葉から11世紀前葉は、北東北で区画（防御性）集落が盛行する。今回の調査で確認されていないが、調査区外に濠が存在する可能性もある。

なお、調査区より北の地点から奈良時代の土師器が採取されていることから（橘・奈良1977）、今回の調査区の北側に奈良時代の遺構が存在すると推定される。また、今回の調査では遺構・遺物は検出しなかったが、調査区より南東の地点で人骨が発見されており（森本・橘1974）、中世には遺跡南端が埋葬域として利用されている。（平山）

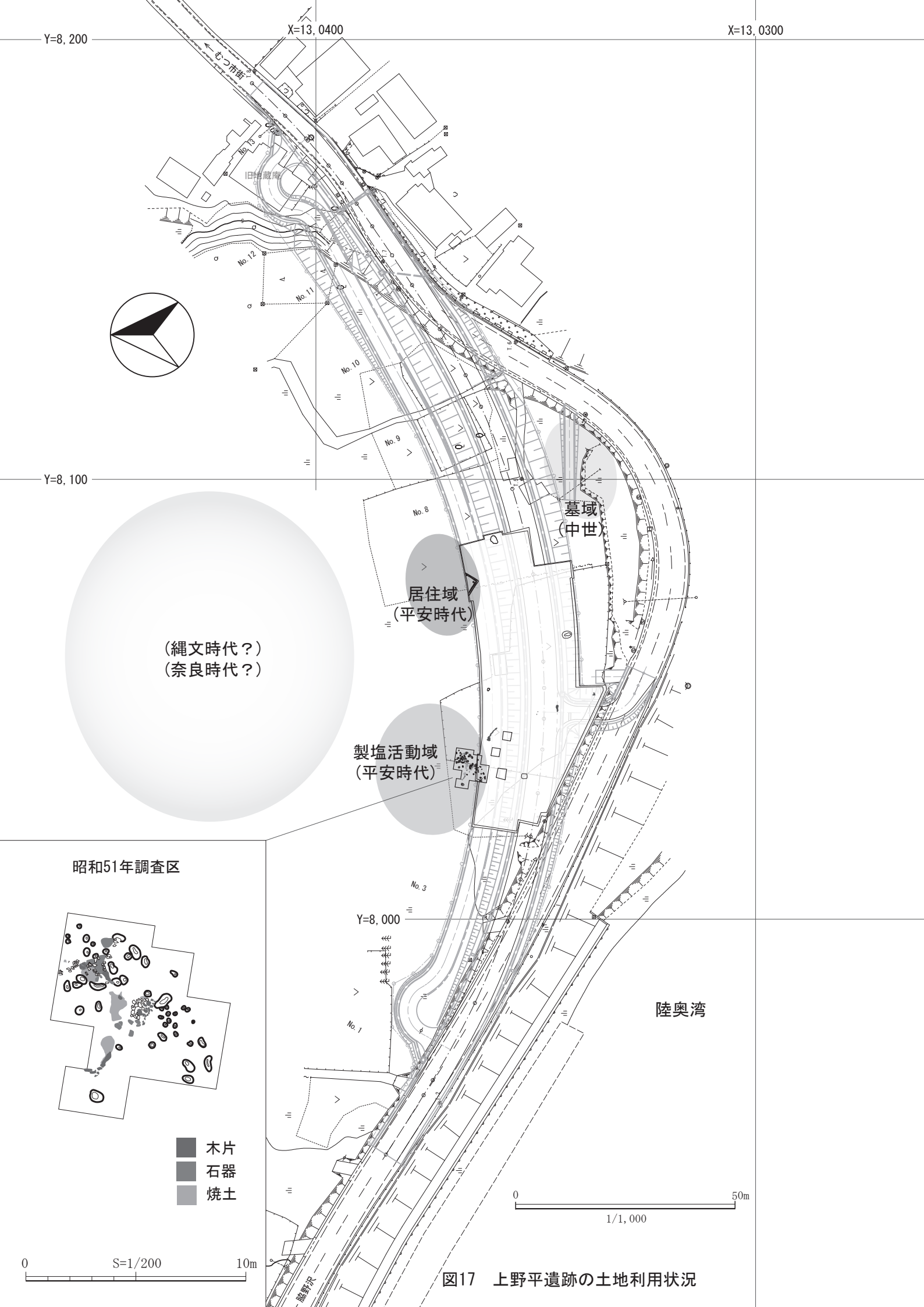


図17　上野平遺跡の土地利用状況

引用参考文献

青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さんグループ　2003 『下北半島西通りの民俗』青森県史叢書

青森県教育委員会　1980 『古館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第54集

青森県教育委員会　1986 『西通道』青森県「歴史の道」調査報告書

青森県教育委員会　1993 『高野川（２）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第153集

青森県教育委員会　1995 『高野川（３）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第179集

青森県教育委員会　1995 『板子塚遺跡・熊ヶ平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第180集

青森県教育委員会　2005 『大沢遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書　第386集

青森県教育委員会　2018 『内田（１）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第592集

青森県教育委員会　2020 『青森県遺跡詳細分布調査報告書32』青森県埋蔵文化財調査報告書　第615集

青森県史編さん考古部会　2005 『青森県史　資料編　考古３　弥生～古代』

川内町　1999 『川内町史　民俗編　自然Ⅰ（気象、地形地質）編』川内町史編さん委員会

川内町　2005 『川内町史　原始・古代編　中世編　近世編』川内町史編さん委員会

川内町教育委員会　1991 『戸沢川代遺跡発掘調査報告書』

松前町教育委員会　1985 『札前　国道228号線改良拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告』

岩井浩介　2004 「早稲田遺跡出土資料の再検討」『金沢大学考古学紀要』第27号　金沢大学文学部考古学講座

岩井浩介　2010 「早稲田遺跡出土資料の再々検討」『青森県考古学』第18号　青森県考古学会

岩井浩人　2009 「津軽地域性における古代土器食膳具の変遷－９世紀から11世紀を中心に－」『青山考古』第24号　青山考古学会

岩井浩人　2009 「津軽南域における古代の土器様相」『扶桑　田村晃一先生喜寿記念論文集』青山考古学会田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会

内田武志・宮本常一編　1971 『菅江真澄全集』第二巻　株式会社　未来社

宇部則保　2010 「９・10世紀における青森県周辺の地域性」『古代末期の境界世界』法政大学国際日本学研究所

宇部則保・大野　亨・加藤隆則　2014 「５．下北・上北・三八地区」『９～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』北東北古代集落遺跡研究会

江坂輝弥　1967 「下北半島の先史・歴史時代遺跡」『下北　自然・文化・社会』九学会連合下北調査委員会

大橋康二　1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社

北林八洲晴　2005 「続　青森の塩づくり－現状と展開－」『葛西　勵先生還暦記念論文集　北奥の考古学』葛西　勵先生還暦記念論文集刊行会

齋藤　淳　2002 「本州における擦文土器の変遷と分布について」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古希を祝う会

齋藤　淳　2008a 「北奥出土の擦文土器について」『青森県考古学』第16号　青森県考古学会

齋藤　淳　2008b　「北奥「蝦夷」社会の展開」『地域と文化の考古学Ⅱ』明治大学文学部考古学研究室
齋藤　淳　2010　「野尻遺跡群の土器編年について」『研究紀要』第15号　青森県埋蔵文化財調査センター
齋藤　淳　2012　「北奥における擦文（系）土器の終末について」『青森県考古学』第20号　青森県考古学会
齋藤　淳　2013　「古代北奥・北海道におけるロクロ整形食膳具の地域性について」『青森県考古学』第21号　青森県考古学会
齋藤　淳　2016　「北奥「蝦夷」集落の動態」『考古学ジャーナル』688
齋藤　岳　2004　「下北半島ムシリ遺跡採集の石刃鏃－小野忠正氏採集資料の再評価－」『北海道考古学』第40輯　北海道考古学会
鈴木琢也　2006　「擦文土器からみた北海道と東北北部の文化交流」『北方島文化研究』第４号　北方島文化研究会
高杉博章　1977　「本州における擦文土器の様相」『考古学風土記』第２号
高橋　透　2013　「東北地方における古代の塩の生産と流通－陸奥湾から太平洋沿岸地域を中心に－」『第16回　古代官衙・集落研究会報告書　塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所報告書　第12冊　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
橘　善光・奈良正義　1977　「青森県宿野部上野平遺跡－擦文時代の製塩遺跡－」『北海道考古学』第13輯　北海道考古学会
塚本浩司　2002　「擦文土器の編年と地域差について」『東京大学考古学研究室研究紀要』第17号　東京大学考古学研究室
塚本浩司　2004　「10世紀中葉以降、東北北部出土の擦文土器の分類とその背景について」『北方研究』第６号　北方懇話会
寺田徳穂　1976　「下北郡川内町上の平遺跡」『考古風土記』創刊号
永井久美男編　1998　『近世の出土銭Ⅱ－分類図版篇－』兵庫埋蔵銭調査会
箱崎真隆　2021　「年輪年代学の現在」『樹木・木材と年代研究』国立歴史民俗博物館研究叢書８　朝倉書店
森田賢司　2015　「最花南遺跡隣接地試掘調査報告」『むつ市文化財調査報告第43集』むつ市教育委員会
森田賢司　2018　「田野沢（１）遺跡確認調査報告」『むつ市文化財調査報告第47集』むつ市教育委員会
森本岩太郎・橘　善光　1974　「下北半島西通発見の人骨と陶器」『北奥古代文化』第６号　北奥古代文化研究会
山田秀三　1983　『山田秀三著作集　アイヌ語地名の研究』第二巻　株式会社　草風館（初出1971）
八木光則　2010　「古代末期の北奥蝦夷社会」『古代末期の境界世界』法政大学国際日本学研究所
横山英介　1990　『擦文文化』考古学ライブラリー59　ニュー・サイエンス社

表３　土器観察表

図版番号	遺構名	出土位置	層位	種類	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	備考
図９－１	SI01		１層	土師器	坏	口縁部	(11.2)		(3.4)	ロクロ	ロクロ	
図９－２	SI01		床面・１層	土師器	坏	口縁～胴	14.6	5.6	5.3	ロクロ	ロクロ	P-1　回転糸切　内外面炭化物付着
図９－３	SI01		床面・１層	土師器	甕	口縁～胴	(29.8)		(26.7)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	P-2　煤付着　被熱
図９－４	SI01		１層	土師器	甕	口縁部			(3.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	被熱　製塩土器の可能性
図９－５	SI01		１層	土師器	甕	口縁部			(4.8)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	
図９－６	SI01・SI01東側		１層・４層・Ⅲ層上面	土師器	甕	胴部			(8.6)	ケズリ	ナデ	
図９－７	SI01B-B'セク		床面	土師器	甕	胴部			(6.7)	ケズリ	ナデ	
図９－８	SI01		１層	土師器	甕	胴部			(4.3)	ロクロ	ロクロ	
図９－９	SI01		４層	土師器	甕	底部		(6.0)	(1.7)	ケズリ	ナデ	外底面ケズリ
図10－１	SI01(旧)SD01		１層	土師器	甕	口縁部			(7.4)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	被熱
図10－２	SI01・SI01(旧)		１層・８層	土師器	甕	胴部			(6.5)	ケズリ	ナデ	
図10－３	SI01(旧)SD01		１層	土師器	甕	胴部			(1.9)	ケズリ	ナデ	
図11－１	SK01		１層・１層上層	土師器	甕	胴部			(6.2)	ケズリ	ナデ	
図12－１	S51調査区		埋土	縄文	深鉢	胴部			(5.0)	多軸絡条体		繊維混入 縄文時代前期
図12－２	試掘トレンチ1	M-10～13		縄文	深鉢	胴部			(3.4)	不明		繊維混入 縄文時代前期
図12－３	S51調査区	B06	埋土	縄文	深鉢	口縁部			(2.0)	無文		口唇にＲＬ
図14－１	S51調査区	A'05	埋土	土師器	甕	口縁部			(4.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	製塩土器の可能性
図14－２	試掘トレンチ1	M-10～13		土師器	甕	口縁部			(2.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	
図14－３	S51調査区	M-20	埋土	土師器	甕	胴部			(2.7)	ケズリ	ナデ	
図14－４	S51調査区	A'05	埋土	土師器	甕	胴部			(3.0)	ケズリ	ナデ	
図14－５		P-14	撹乱	土師器	甕	胴部			(4.0)	ケズリ	ナデ	
図14－６	調査区西壁	O-5	Ⅰ	土師器	甕	胴部		(8.0)	(2.0)	ケズリ	ナデ	外底面ナデ
図14－７		表採		土師器	甕	底部		(8.0)	(1.0)	ケズリ	ナデ	外底面ナデ？（摩滅）
図14－８		P-19	Ⅰ	土師器	甕	底部		(6.7)	(2.6)	ケズリ	ナデ	被熱　外底面ケズリ
図14－９	S51調査区		埋土	須恵器	甕	口縁～胴			(4.8)	タタキ	ナデ	
図14-10	S51調査区	A03	埋土	擦文土器	甕	口縁部			(2.6)	沈線	ヨコナデ・ミガキ	摩滅
図14-11	S51調査区	B06	埋土	擦文土器	甕	口縁部			(2.5)	沈線・押型	ミガキ	
図14-12	S51調査区	A'05	埋土	擦文土器	甕	胴部			(4.7)	沈線・ハケメ・貼付囲繞帯	ミガキ	
図14-13		N-09	Ⅱ	擦文土器	甕	胴部			(2.0)	ハケメ・貼付囲繞帯	ナデ？	
図14-14	S51調査区	B06	埋土	擦文土器	甕	胴部			(3.8)	沈線・ハケメ	ミガキ	被熱

表４　石器観察表

図版番号	遺構名	出土位置	層位	器種	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
図９-10	SI01		1	礫石器	磨石	(3.1)	(3.4)	(1.8)	16.9	凝灰岩	
図12-４	試掘トレンチ１	M-10～13		剥片石器	石鏃	4.7	1.6	0.5	2.4	珪質頁岩	有茎平基
図12-５		O-15	Ⅱ	剥片石器	石匙	6.4	3.5	0.9	13.5	珪質頁岩	縦形
図12-６		K-17	Ⅱ	剥片石器	スクレイパー	9.0	5.1	1.7	61.4	珪質頁岩	
図12-７		-	表採	剥片石器	スクレイパー	3.5	4.5	1.6	17.5	緑色凝灰岩	
図12-８	試掘トレンチ１	M-10～13		剥片石器	二次加工のある剥片	4.5	2.5	1.0	8.9	珪質頁岩	
図12-９		K-20	Ⅱ	剥片石器	微細剥離のある剥片	4.7	6.9	1.9	46.1	珪質頁岩	
図12-10		O-21	Ⅲ	剥片石器	微細剥離のある剥片	5.6	2.7	0.9	8.3	珪質頁岩	
図12-11		P-6	Ⅲ	剥片石器	微細剥離のある剥片	5.9	4.0	1.5	19.7	珪質頁岩	
図12-12		M-9	Ⅲ	剥片石器	微細剥離のある剥片	4.7	3.6	1.1	10.9	珪質頁岩	
図12-13		N-6	Ⅲ	剥片石器	微細剥離のある剥片	4.1	8.4	2.3	66.6	珪質頁岩	
図13-１-１		O-15	Ⅱ	剥片石器	石核	9.1	14.1	6.1	12.6	珪質頁岩	８点の接合資料
図13-１-２		O-15	Ⅱ						10.1		
図13-１-３		O-16	Ⅱ						273.8		
図13-１-４		O-16	Ⅱ						43.9		
図13-１-５		O-16	Ⅱ						27.0		
図13-１-６		O-16	Ⅱ						6.8		
図13-１-７		O-16	Ⅲ						133.3		
図13-１-８		O-16	Ⅲ						18.8		
図13-２-１		K-14	Ⅱ	剥片石器	石核	10.0	11.4	7.0	584.5	珪質頁岩	２点の接合資料
図13-２-２		L-11	Ⅲ						2.5		
図13-３		-	表採	剥片石器	石核	1.9	3.0	1.9	10.3	珪質頁岩	
図13-４		L-17	Ⅱ	礫石器	磨製石斧	(2.2)	(3.7)	(1.3)	8.0	緑色凝灰岩	
図14-29		O-15	Ⅱ	礫石器	砥石	3.2	2.8	1.0	6.4	珪質頁岩	
図14-30	S51調査区	A'-5	埋土	礫石器	砥石	(3.8)	(2.1)	(1.6)	10.9	凝灰岩	
図14-31	S51調査区	A'-5	埋土	礫石器	砥石	(4.7)	(3.4)	(1.5)	14.5	凝灰岩	

表５　土製支脚観察表

図版番号	遺構名	出土位置	層位	長さ (cm)	体部幅 (cm)	重量 (g)	外形	内孔形	内孔径・長(cm)	備考
図 14-15	S51調査区	A'-5	埋土	(7.4)	(4.5)	52.2	多角柱状	円形	(0.8)	体部片
図 14-16	S51調査区	A'-5	埋土	(4.2)	(3.4)	16.5	多角柱状	円形	(0.8)	体部片
図 14-17	S51調査区	B-6	埋土	(2.4)	(2.6)	8.1	多角柱状	円形	(0.8)	体部片
図 14-18	S51調査区	A'-5	埋土	(3.2)	(2.6)	13.1	多角柱状	円形	(0.9)	体部片
図 14-19	S51調査区	A'-5	埋土	(2.7)	(3.0)	12.2	多角柱状	円形	(0.8)	体部片
図 14-20	S51調査区	A'-5	埋土	(3.8)	(4.1)	25.4	多角柱状	円形	(0.9)	体部片
図 14-21		O-10	Ⅱ	(3.2)	(2.8)	15.1	多角柱状	円形	(1.2)	体部片
図 14-22	S51調査区	B-6	埋土	(4.1)	(3.3)	19.7	多角柱状	円形	(0.7)	体部片
図 14-23	S51調査区	A'-5	埋土	(4.1)	(2.8)	14.0	多角柱状	円形	(0.8)	体部片
図 14-24	S51調査区	A'-5	埋土	(3.5)	(2.3)	7.1	多角柱状	円形	(0.7)	体部片
図 14-25		O-9	Ⅱ	(2.2)	(4.2)	13.5	多角柱状	円形	(1.2)	支・脚部
図 14-26	S51調査区	B-6	埋土	(4.0)	(5.0)	41.1	円柱状	円形	不明	体部片
図 14-27		O-16	Ⅱ	(2.6)	(4.0)	15.0	円柱状	円形	(1.2)	体部片
図 14-28	S51調査区	B-6	埋土	(2.8)	(3.9)	11.1	円柱状	円形	(1.5)	体部片

表６　鉄生産関連遺物観察表

図版番号	遺構名	出土位置	取上番号	層位	種類	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	備考
図９-11	SI01(新)		P-X	床面	鉄製品	39	52	25	32.1	板状
図９-12	SI01		F-X	２層	鉄滓	(52)	(63)	30	81.1	碗型滓　含鉄か？
図９-13	SI01		P-2	床面	鉄滓	(39)	28	12	15.7	炉内流動滓か？
図９-14	SI01		P-2	床面	溶解物	(38)	(28)	11	5.8	ガラス質
図14-32	試掘トレンチ１	M-10～13	F-X		鉄滓	(33)	(44)	21	45.1	炉内滓か？

表７　陶磁器観察表

図版番号	遺構名	出土位置	Ｐ番	層位	種類	器種	部位	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	外面文様	内面文様	備考
図14-33	試掘トレンチ１	M-10～13	P-X	表採	磁器	碗	口縁部			(1.6)		波か？	肥前Ⅳ～Ⅴ期
図14-34	試掘トレンチ１	M-10～13	P-X	表採	陶器	小碗？	腰部			(1.3)	ロクロ・灰釉	ロクロ	

表８　銭貨観察表

図版番号	遺構名	出土位置	取上番号	層位	種類	銭種	外縁外径（mm）	外縁内径（mm）	内縁外径（mm）	内縁内径（mm）	外縁厚（mm）	文字面厚（mm）	重量（g）	備考
図14-35		M-20	銭-X	Ⅰ	銅銭	寛永通寶	25.13	19.73	7.31	6.04	1.21	0.58	2.5	背文　寛永通寶２期（新寛永）　寛文８年(1668)初鋳

調査区空中写真（南西→）

調査区空中写真（東→）

写真１　遺跡近景

蛎崎からの遺跡遠景（西→）

基本土層（東→）

写真２　遺跡遠景・基本土層

作業状況（南東→）

遺構検出状況（北東→）

遺構検出状況（西→）

第１号竪穴建物跡　検出状況（南→）

第１号竪穴建物跡　精査状況（北東→）

第１号竪穴建物跡　精査状況（南→）

第１号土坑　検出状況（東→）

第１号土坑　精査状況（東→）

写真３　作業状況

第１号竪穴建物跡（新）　遺物出土状況（南→）

遺物出土状況（北東→）

遺物（９－２）出土状況（南西→）

写真４　第１号竪穴建物跡（新）（１）

第１号竪穴建物跡（新）　遺物（９－３）出土状況（北西→）

第１号竪穴建物跡（新）　完掘状況（南→）

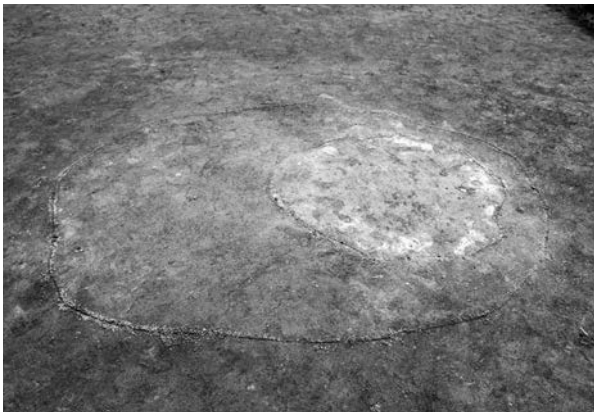
写真５　第１号竪穴建物跡（新）（２）

第１号竪穴建物跡（旧）　完掘状況（南→）

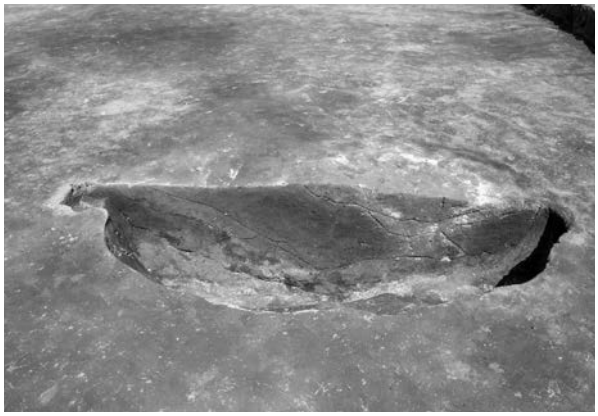
第１号竪穴建物跡　Ｂ－Ｂ’土層断面（西→）

第１号竪穴建物跡　Ａ－Ａ’土層断面（西→）

写真６　第１号竪穴建物跡（旧）

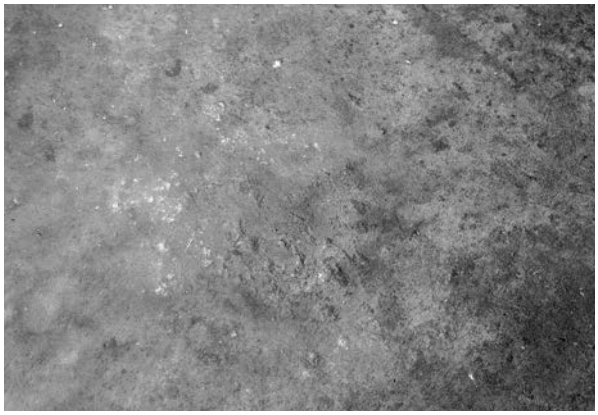


第１号土坑　検出状況（西→）

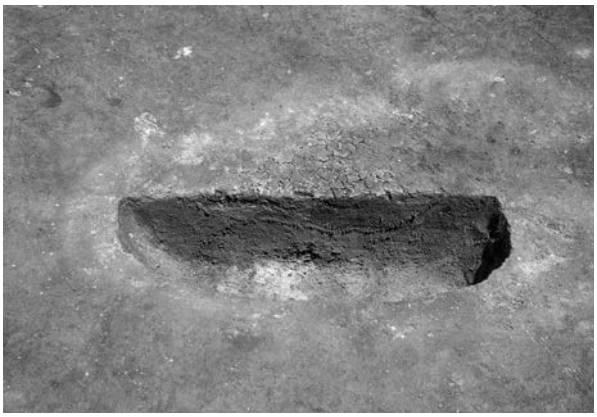


第１号土坑　土層断面（西→）

第１号土坑　完掘状況（西→）

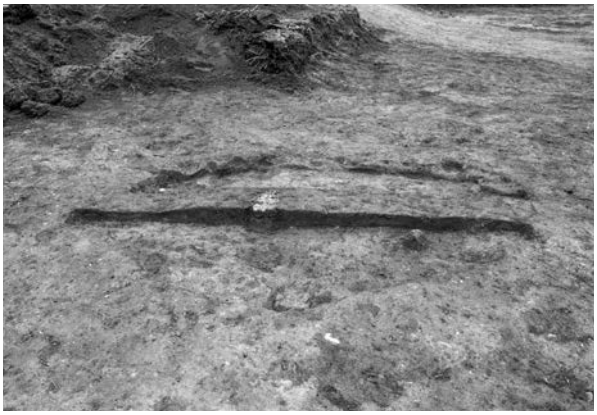


第２号土坑　検出状況（南西→）



第２号土坑　土層断面（南西→）

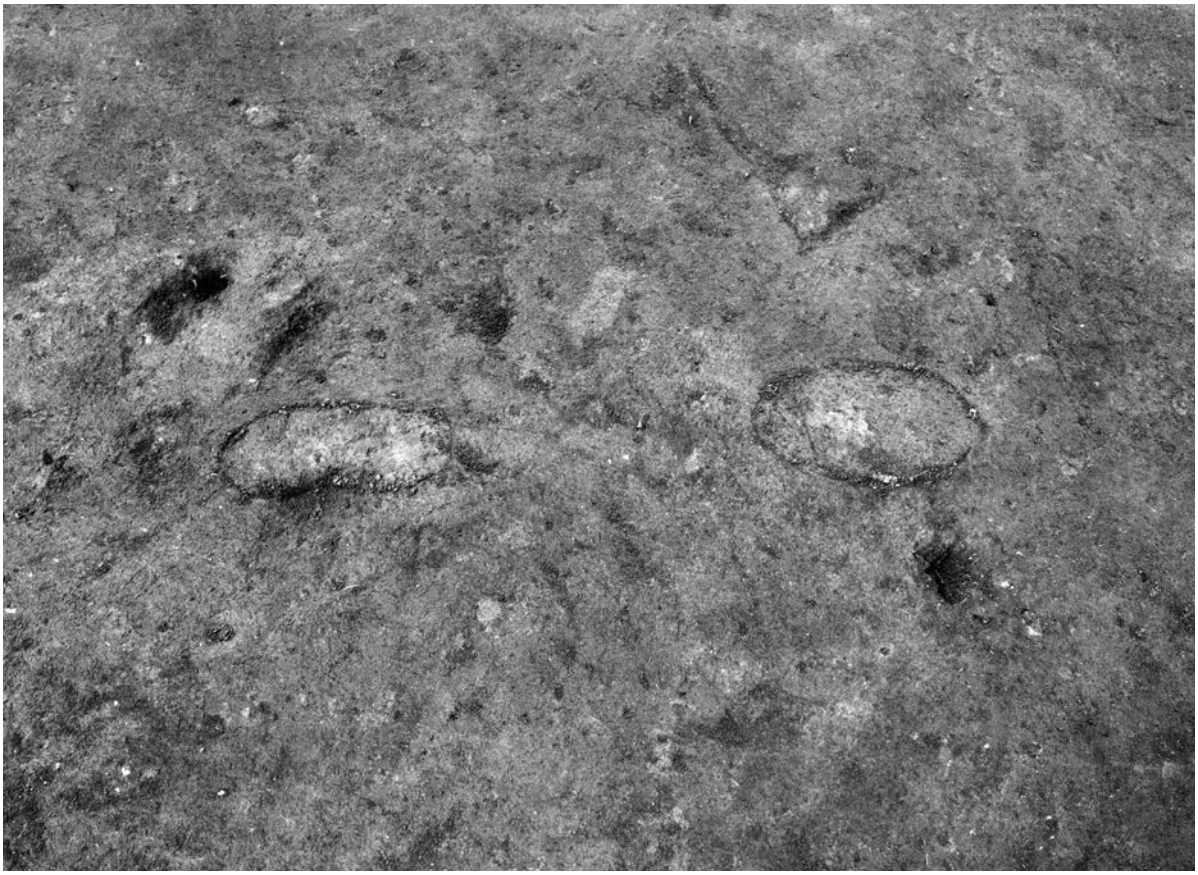
第２号土坑　完掘状況（南西→）



第３号土坑　土層断面（北西→）

第３号土坑　完掘状況（北西→）

写真７　土坑



第１号焼土遺構　検出状況（南西→）

第１号焼土遺構　断面（南西→）

写真８　焼土遺構（１）

第２号焼土遺構　検出状況（南→）

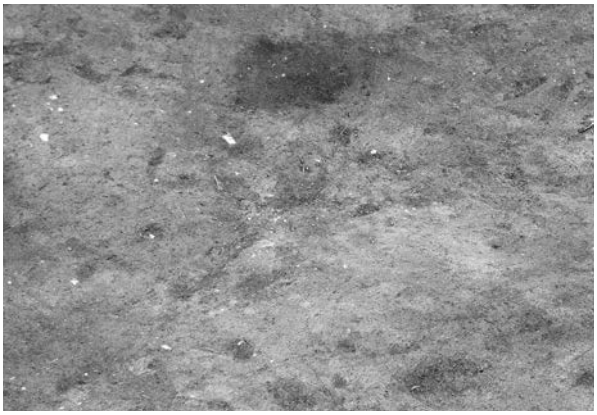
第２号焼土遺構　断面（南→）

第３号焼土遺構　検出状況（南→）

第３号焼土遺構　Ａ－Ａ’断面（南→）

第３号焼土遺構　Ｂ－Ｂ’断面（南→）

第３号焼土遺構　Ｃ－Ｃ’断面（南→）


第７号焼土遺構　検出状況（西→）

第７号焼土遺構　断面（西→）

写真９　焼土遺構（２）

調査区完掘状況（第Ⅱ層面）（西→）

調査区完掘状況（第Ⅲ層面）（東→）

写真10　調査完了状況（１）

調査区完掘状況（第Ⅳ層面）（西→）

調査区完掘状況（第Ⅳ層面）（東→）

写真11　調査完了状況（２）

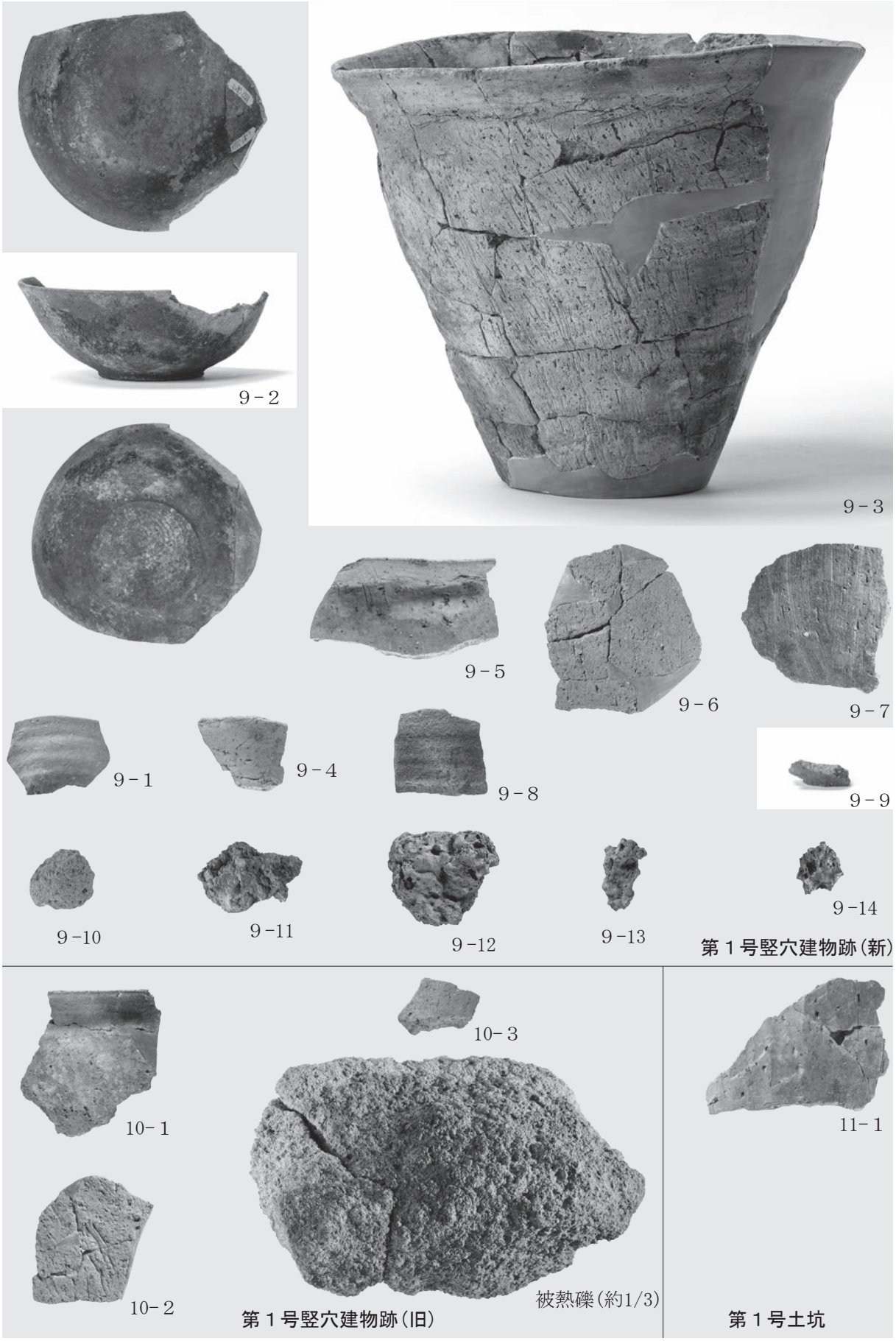


写真12　遺構内出土遺物

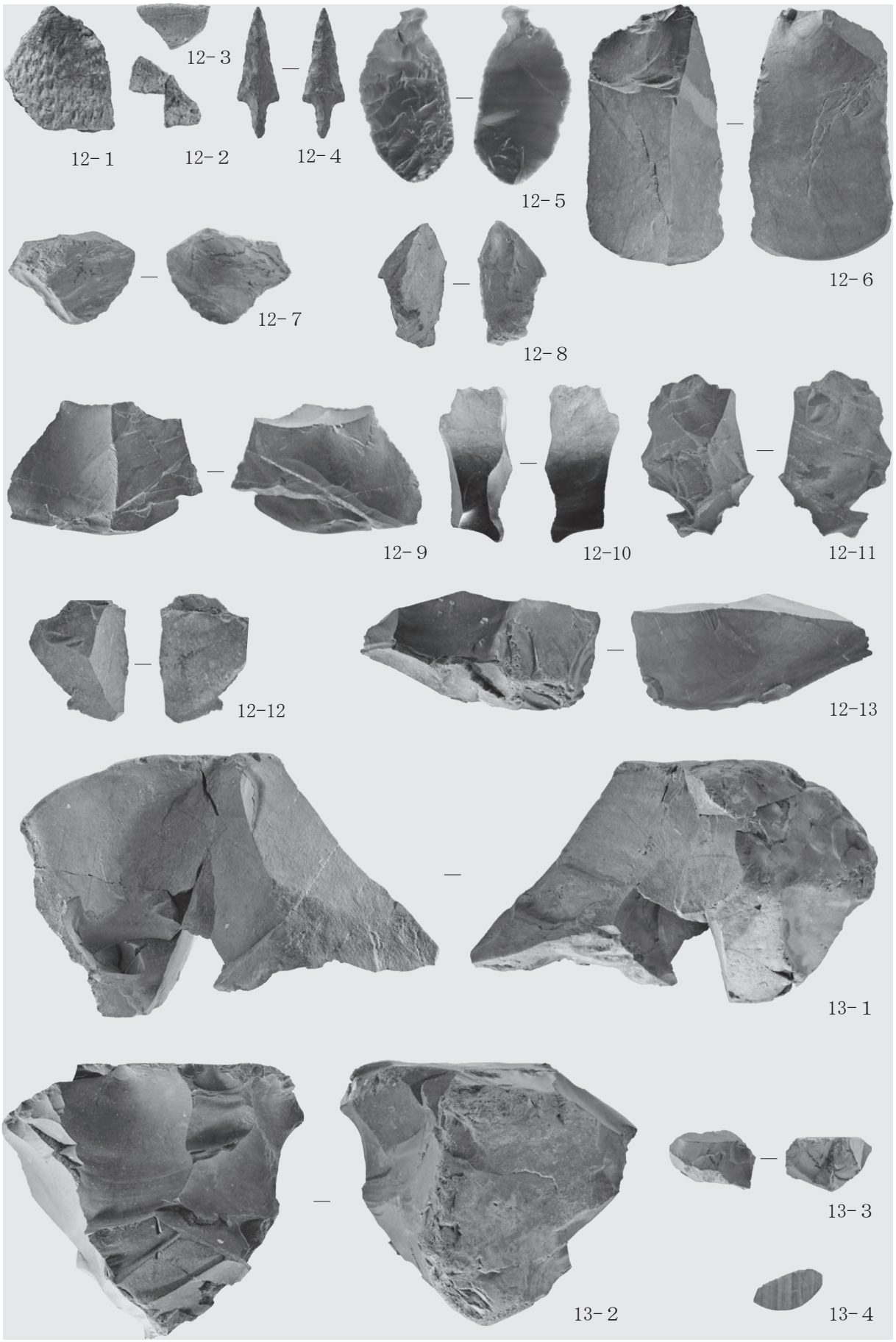


写真13　遺構外出土遺物（１）

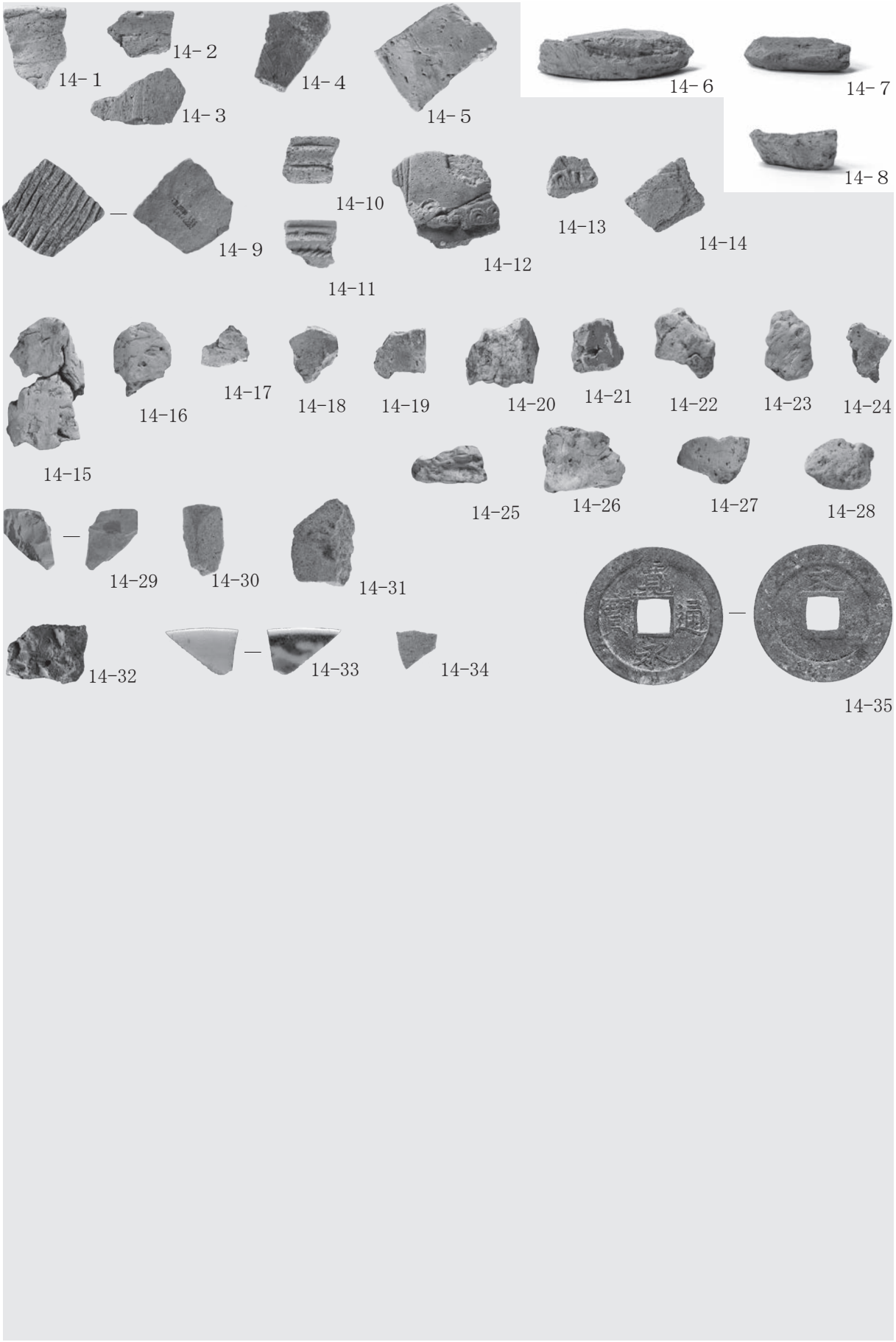


写真14　遺構外出土遺物（２）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	うわのたいらいせき
書　　名	上野平遺跡
副　書　名	国道338号交通安全対策事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第627集
編 著 者 名	平山明寿　笹森一朗
編 集 機 関	青森県埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15　　TEL 017-788-5701
発 行 機 関	青森県教育委員会
発行年月日	2022年3月16日

ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コード		世界測地系 (JGD2011)		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
上野平遺跡 うわのたいらいせき	青森県むつ市 あおもりけん　し 川内町宿野部 かわうちまちしゅくのべ 上野平 うわのたいら	02208	208097	41° 10′ 26″	140° 55′ 47″	20200512 ～ 20200717	1,500	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野平遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代 平安時代以降	竪穴建物跡　1 土坑　1 土坑　2 焼土遺構　4	縄文土器（前期） 土師器・須恵器 擦文土器 鉄生産関連遺物	

要　　約	当遺跡は陸奥湾沿岸に位置する平安時代の集落遺跡で、存続期間は10世紀中葉以前から11世紀にかけてであると推測される。 縄文時代の遺構は検出しなかった。遺構外から縄文時代前期と推定される縄文土器と、石鏃・石匙・スクレイパー・二次加工のある剥片・微細剥離のある剥片・石核・剥片・磨製石斧が出土したが、散布的な出土であった。 平安時代の遺構は竪穴建物跡１棟・土坑１基を検出した。本建物跡は同じ場所で造り替えられており、SI01（新）の規模はSI01（旧）より小さく、SI01（旧）の中に入子状に構築している。第１号土坑は最終堆積層に苫小牧－白頭山火山灰が堆積していた。遺物は土師器・須恵器・擦文土器・土製支脚・砥石・鉄生産関連遺物が出土していることから、北海道との関連をもち、また、調査区周辺で製塩・鉄生産を行っていたと推測される。 土坑２基と焼土遺構は、検出層位から平安時代以降の年代が考えられる。

青森県埋蔵文化財調査報告書　第627集

上野平遺跡

－国道338号交通安全対策事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日　2022年３月16日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15
TEL017-788-5701　FAX017-788-5702
印　　刷　株式会社新印刷興業
〒030-0142 青森県青森市大字野木字野尻37-728
TEL017-739-6431　FAX017-762-1804

この報告書は300部作成し、印刷経費は１部あたり3,300円（うち県負担1,419円）です。